

文部科学省委託調査

令和6年度「公的統計調査等を活用した教育施策の改善に係る取組」

子どもの成長過程を解明するための
長期的な縦断調査に資する調査研究

報告書

令和7年3月

株式会社サーベイリサーチセンター

目 次

| | |
|--|----|
| I 調査研究の概要 | 3 |
| 1. 背景・目的 | 3 |
| 2. 実施内容 | 4 |
| II 教育政策の立案に資する縦断調査の結果等の分析 | 6 |
| 1. 検討・実施事項の概要 | 6 |
| 2. 読書習慣に関する分析 | 6 |
| 3. 習い事に関する分析 | 15 |
| 4. 就職活動の結果に関する分析 | 23 |
| 5. 調査回答者の変化に関する分析 | 38 |
| 6. 小括 | 53 |
| III 平成 22 年出生児縦断調査の実施を見据えた調査項目等の検討 | 55 |
| 1. 検討・実施事項の概要 | 55 |
| 2. 調査方法 | 56 |
| 3. 調査結果 | 57 |
| 4. 小括 | 64 |
| V 参考資料 | 65 |
| 1. 本報告書で参照・言及した文献について | 65 |
| 2. 本報告書で参照・言及した調査について | 65 |

I 調査研究の概要

1. 背景・目的

「21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)」(以下「平成13年出生児縦断調査」という。)は、厚生労働省が平成13年から実施していたところ、子供や若者を取り巻く環境がその後の進路選択等に与える影響を明らかにし、教育や就業に関する国の施策の企画立案、実施のための基礎資料を得るため、文部科学省が第16回(平成29年)から厚生労働省と共管の下で実施を引き継ぎ、現在までに第22回調査の結果までが公表されている。

「経済財政運営と改革の基本方針2023」¹においては、「各政策分野におけるKPIへのWellbeing指標の導入を進める」ことが求められている。また、教育再生実行会議第12次提言²では、データによる政策立案として、「子供の成長過程を解明するための長期的な縦断調査」が求められている。さらに、「教育振興基本計画」³は「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を掲げるとともに、客観的な根拠を重視した教育政策の推進を求めている。平成13年出生児縦断調査は、「生活の満足度・人間関係について」等の質問項目を加える等、このような要請に応える調査として、毎回質問項目の検討を行っている。

「公的統計の整備に関する基本的な計画」第IV期基本計画⁴では「今後5年間に講ずる具体的施策」において、「21世紀出生児縦断調査(平成22年出生児)」(以下「平成22年出生児縦断調査」という。)の調査対象者の進学等を勘案し、関係府省との調整を含め、施策ニーズに即した今後の調査の方向性や調査内容について検討することについては「令和5年度(2023年度)末までに結論を得る。」とされていたところ、厚生労働省では令和5年(2023年)3月、「厚生労働統計の整備に関する検討会」の下に「縦断調査の改善に関するワーキンググループ」を設置し、令和6年(2024年)2月9日の第3回ワーキンググループにおける中間まとめの中で、平成13年出生児縦断調査と同様、高校1年等を対象とする令和8年(第16回)調査から文部科学省を実施主体とする共管調査に変更することが適当であるという結論を得た。文部科学省においても、令和8年(2026年)調査(第16回)以降、実施主体を文部科学省とする共管調査に変更することについて、「21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)研究会」において検討を行ってき

¹ 「経済財政運営と改革の基本方針2023 加速する新しい資本主義～未来への投資の拡大と構造的賃上げの実現～」(令和5年6月16日閣議決定)

² 「ポストコロナ期における新たな学びの在り方について(第十二次提言)」(令和3年6月3日)

³ 文部科学省「教育振興基本計画」(令和5年6月16日閣議決定)

⁴ 総務省「公的統計の整備に関する基本的な計画」第IV期基本計画(令和5年3月28日閣議決定)

る。

これまでの 21 世紀出生児縦断調査に関する調査研究では、調査対象者が 30 歳になる頃までを視野に入れ、就労、結婚、出産、子育てなど、様々なライフイベントを捉える調査のほか、回顧法で教育経験等に関する情報を得ることについての提案がなされ、令和5年度の委託調査研究では、予備調査を実施して、回顧法による調査の可能性や課題についての知見が得られた。今後は、これらの成果をもとに、平成 22 年出生児縦断調査の文部科学省での実施に備える必要がある。

本調査研究はこれらの観点を踏まえて行うことで、「子供の成長過程を解明するための長期的な縦断調査」の実現に向けた調査項目の最適化を行うことを目的とする。

2. 実施内容

本調査研究では、主に教育政策の立案に資する分析を行うとともに、過去を振り返る回顧的な質問項目を今後の調査にどのように組み込むかを検討した。

なお、調査の実施・分析にあたっては、文部科学省が設けている「21 世紀出生児縦断調査(平成 13 年出生児)研究会」の有識者委員など、複数の有識者に対してヒアリングをし、助言を受けた。

(1)教育政策の立案に資する縦断調査の結果等の分析

これまで蓄積・公開されてきた第 22 回までの平成 13 年出生児縦断調査の結果を基にした分析を検討・実施した。

いくつかの分析テーマを検討・設定して、今後分析を深めていくことを想定し、基礎的なデータの集計・分析を実施した。

(2)平成 22 年出生児縦断調査の実施を見据えた調査項目等の検討

これまでの委託調査研究では、前述のとおり、回顧法で教育経験等に関する情報を得ることについて検討されてきた。令和5年度「公的統計調査等を活用した教育施策の改善の推進するための取組」(子どもの成長過程を解明するための長期的な縦断調査に関する調査分析)⁵ では予備調査が実施され、回顧法に

⁵ 浜銀総合研究所(2024)「子どもの成長過程を解明するための長期的な縦断調査に関する調査分析 報告書」(令和 6 年 3 月)

よる調査の可能性や課題についての知見が得られている。

令和5年度「公的統計調査等を活用した教育施策の改善の推進するための取組」(子どもの成長過程を解明するための長期的な縦断調査に関する調査分析)にて実施された予備調査の結果や、回顧的な調査項目に関する先行研究、調査をふまえて、第16回調査以降の調査項目に回顧的な調査項目をどのように配分していくべきか、改めてどのような調査項目を追加すべきかを検討した。

(3)有識者に対するヒアリング

主に「教育政策の立案に資する縦断調査の結果等の分析」の「調査回答者の変化に関する分析」、「回顧的な調査項目」について検討を進めるにあたり、下記の有識者にヒアリングを行い、助言を受けた。

図表 1-1 ヒアリングを実施した有識者一覧

| 氏名(50音順) | 所属等 |
|----------|----------------------------------|
| 石田 浩 | 東京大学特別教授室・社会科学研究所特別教授 |
| 遠藤 利彦 | 東京大学大学院教育学研究科教授 |
| 佐藤 香 | 東京大学社会科学研究所社会調査・データアーカイブ研究センター教授 |
| 土屋 隆裕 | 横浜市立大学データサイエンス研究科長 |
| 濱中 義隆 | 国立教育政策研究所高等教育研究部部長 |

Ⅱ 教育政策の立案に資する縦断調査の結果等の分析

1. 検討・実施事項の概要

本調査研究では、今後改めて教育施策に関連する分析を深めていくことを想定し、子供のころの読書習慣、習い事の内容に着目し、分析を行った。また、平成13年出生児縦断調査において、結果が公表されているなかで最新の第22回調査の結果の深掘りとして、4年制大学に通う回答者の就職活動に関する集計・分析を行った。さらに、縦断調査の特性を生かし、調査回答者の変化を分析し、教育政策の立案に資する基礎的なデータを得ることを目的とした集計・分析を行った。

2. 読書習慣に関する分析

(1) 分析の背景・目的

教育振興基本計画では、教育政策の目標の一つに「目標2 豊かな心の育成」が掲げられている。この目標では、「子供たちの豊かな情操や道徳心を培い、正義感、責任感、自他の生命の尊重、他者への思いやり、自己肯定感、人間関係を築く力、社会性などを、学校教育活動全体を通じて育み、子供の最善の利益の実現と主観的ウェルビーイングの向上を図るとともに人格形成の根幹及び民主的な国家・社会の持続的発展の基盤を育む。」とされており、基本施策の一つに「読書活動の充実」が挙げられている。

子供のころの読書活動が子供のその後に与える影響に関しては、様々な先行研究が行われてきた。例えば国立青少年教育振興機構(2021)⁶では、子供のころの読書量が多い人ほど、非認知能力が高い傾向にあることが報告されている。しかしながら、「読書」の内容や形式の違いが非認知能力に及ぼす影響については、まだ十分に明らかにされていない。特に、小説や絵本などの物語性を有する読書と、雑誌やマンガといった娯楽的要素の強い読書との違いに注目することは、今後の教育施策を検討する上でも重要である。

本項では、平成13年出生児縦断調査の第22回調査の非認知能力に関する項目と第7回、第8回、第10回調査の子供の読書習慣に関する項目を用いて、成年期の非認知能力と、子供のころの読書習慣とその内容にどのような関連があるのかを分析することを目的とした。

⁶ 国立青少年教育振興機構(2021)「子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究 報告書」(令和3年3月)

(2)分析結果

①子供の読書習慣に関する回答

平成 13 年出生児縦断調査において、調査対象となっている子供の読書習慣に関する項目は、第7回、第8回、第 10 回調査の保護者調査で設定されている。具体的には、子供が1か月間に読んだ本の冊数に関する回答を得ており、各回の調査結果は図表 2-2-1、2-2-2 のとおりとなっている。本、小説などの読書習慣をみると、「読まない」の回答割合(=不読率)は第7回、第 8 回調査で6%前後、第 10 回調査では 8.7%となっており、第7回調査から第 10 回調査にかけて、本、小説などを読まなくなる変化がややみられる。雑誌・マンガの読書習慣をみると、「読まない」の回答割合は第7回調査で 43.4%、第8回調査で 34.1%、第 10 回調査で 19.0%となっており、第7回から第 10 回調査にかけて、雑誌・マンガを読むようになる変化がみられる。

なお、ここで示しているのは、第 22 回調査に回答があった者に限った集計結果である。

図表 2-2-1 第7回、第 8 回、第 10 回調査の読書習慣(本、小説など)の回答結果

| | 上段:件数、下段:% | | | | | | |
|-------------------|------------------|---------------|------------------|------------------|------------------|---------------|-------------|
| | 読 ま な い | 1 冊 | 2 、 3 冊 | 4 、 5 冊 | 6 、 7 冊 | 8 冊 以上 | 無 回 答 |
| 第7回調査 (n=21,523) | 1,244 5.8 | 2,403 11.2 | 6,058 28.1 | 5,694 26.5 | 2,025 9.4 | 3,608 16.8 | 491 2.3 |
| 第8回調査 (n=21,523) | 1,339 6.2 | 2,851 13.2 | 6,393 29.7 | 5,168 24.0 | 1,946 9.0 | 3,255 15.1 | 571 2.7 |
| 第10回調査 (n=21,523) | 1,876 8.7 | 3,856 17.9 | 6,550 30.4 | 4,390 20.4 | 1,499 7.0 | 2,390 11.1 | 962 4.5 |

図表 2-2-2 第7回、第 8 回、第 10 回調査の読書習慣(雑誌・マンガ)の回答結果

| | 上段:件数、下段:% | | | | | | |
|-------------------|------------------|---------------|------------------|------------------|------------------|--------------|--------------|
| | 読 ま な い | 1 冊 | 2 、 3 冊 | 4 、 5 冊 | 6 、 7 冊 | 8 冊 以上 | 無 回 答 |
| 第7回調査 (n=21,523) | 9,335 43.4 | 5,038 23.4 | 3,567 16.6 | 978 4.5 | 214 1.0 | 444 2.1 | 1,947 9.0 |
| 第8回調査 (n=21,523) | 7,336 34.1 | 5,300 24.6 | 4,195 19.5 | 1,588 7.4 | 401 1.9 | 825 3.8 | 1,878 8.7 |
| 第10回調査 (n=21,523) | 4,097 19.0 | 4,981 23.1 | 5,449 25.3 | 2,746 12.8 | 827 3.8 | 1,828 8.5 | 1,595 7.4 |

②非認知能力に関する項目の回答

平成13年出生児縦断調査の第22回調査の本人(子供)調査において、非認知能力に関する項目は、「自尊感情」、「がまん強さ(ねばり強さ)」、「精神的回復力(レジリエンス)」、「精神的健康」が設定されている。

<自尊感情>

自尊感情に関する項目は、「色々な良い素質を持っている」、「物事を人並みには、うまくやれる」、「自分には、自慢できるところがあまりない」、「自分に対して肯定的である」、「だいたいにおいて、自分に満足している」、「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」の6つの項目が設定されている。

これらの項目について、信頼性係数⁷の値を踏まえ、「自分には、自慢できるところがあまりない」、「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」の項目を除いた4つの項目で、「とてもあてはまる」を4点、「ややあてはまる」を3点、「どちらともいえない」を2点、「あまりあてはまらない」を1点、「まったくあてはまらない」を0点とし、単純加算して0点～16点の「自尊感情」の得点指標(得点が高い方が肯定的な回答であることを示す)を作成した。この「自尊感情」の得点指標の平均値は9.44点となった。

<がまん強さ(ねばり強さ)>

がまん強さ(ねばり強さ)に関する項目は、「新しいアイデアや計画によって、それまで取り組んでいたことから注意がそれることがある」、「困難があっても、私はやる気を失わない」、「あるアイデアや計画に一時的に夢中になっても、あとで興味を失うことがある」、「私は頑張り屋だ」、「目標を決めても、後から変えてしまうことがよくある」、「数ヶ月以上かかるような計画に集中して取り組み続けることは難しい」、「始めたことは、どんなことでも最後までやりとげる」、「私は精魂傾けてものごとに取り組む」の8つの項目が設定されている。

これらの項目について、「非常にあてはまる」を4点、「かなりあてはまる」を3点、「少しあてはまる」を2点、「あまりあてはまらない」を1点、「全くあてはまらない」を0点とし、単純加算して0点～32点の「がまん強さ(ねばり強さ)」の得点指標(得点が高い方が肯定的な回答であることを示す)を作成した。この「がまん強さ(ねばり強さ)」の得点指標の平均値は15.91となった。

⁷ クロンバックの α 係数。複数の質問項目を基に合成指標(得点)を算出する際に、各質問項目が全体として同じ内容を測定したものであるかを確認するために算出するもの。0～1の値をとり、1に近いほど、各質問項目が全体として同じ内容を測定したものであると考えられる。

<精神的回復力(レジリエンス)>

精神的回復力(レジリエンス)に関する項目は、「色々なことにチャレンジするのが好きだ」、「自分の感情をコントロールできる方だ」、「自分の未来にはきっといいことがあると思う」、「新しいことや珍しいことが好きだ」、「動揺しても、自分を落ち着かせることができる」、「将来の見通しは明るいと思う」、「ものごとに対する興味や関心が強い方だ」、「怒りを感じるとおさえられなくなる」、「自分の将来に希望をもっている」の9つの項目が設定されている。

これらの項目について、「はい」を4点、「どちらかというとはい」を3点、「どちらともいえない」を2点、「どちらかというといえ」を1点、「いいえ」を0点とし、単純加算して0点～36点の「精神的回復力(レジリエンス)」の得点指標(得点が高い方が肯定的な回答であることを示す)を作成した。この「精神的回復力(レジリエンス)」の得点指標の平均値は23.07点となった。

<精神的健康>

精神的健康に関する項目は、WHO-5 精神的健康状態表⁸に基づき、「明るく、楽しい気分で過ごした」、「落ち着いた、リラックスした気分で過ごした」、「意欲的で、活動的に過ごした」、「ぐっすりと休め、気持ちよく目覚めた」、「日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった」の5つの項目が設定されている。

これらの項目について、「いつも」を5点、「ほとんどいつも」を4点、「半分以上の期間を」を3点、「半分以下の期間を」を2点、「ほんのたまに」を1点、「まったくない」を0点とし、単純加算して0点～25点の「精神的健康」の得点指標(得点が高い方が肯定的な回答であることを示す)を作成した。この「精神的健康」の指標の平均値は13.78点となった。なお、「精神的健康」の指標については、13点未満である場合に精神的健康状態が低いことを示しているとされている。算出した指標を「13点以上(13点～25点)」と「13点未満(0～12点)」に分類すると、「13点以上(13点～25点)」の割合は54.3%、「13点未満(0～12点)」35.7%となっており、精神的健康状態が低い状態にある回答者が一定数いるという結果になった。

(3)子供のころの読書習慣と非認知能力の関連性

第7回、第8回、第10回調査の「子供の読書習慣」と第22回調査の非認知能力に関する項目の関係を

⁸ <https://www.psychiatri-regionh.dk/who-5/who-5-questionnaires/Pages/default.aspx>

明確にするため、重回帰分析を行うこととした。

分析においては、子供のころの読書習慣がその後の非認知能力に影響しているかを明らかにするため、前述の第 22 回調査の非認知能力に関する項目の得点指標を従属変数とし、第7回、第8回、第 10 回調査の「子供の読書習慣」を説明変数とした。独立変数とする第7回、第8回、第 10 回調査の「子供の読書習慣」は、各回「1冊以上読んでいる」を1、「読んでいない」を0としたダミー変数を投入し、分析を行った。

<「自尊感情」に関する回帰分析>

「自尊感情」について、重回帰分析を行った結果、第7回調査時点で本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、自尊感情の得点が有意に高い傾向を示した($B=.366$ 、 $SE=.132$ 、 $p=.005$)。また、第8回調査時点においても同様の傾向がみてとれたが($B=.249$ 、 $SE=.131$ 、 $p=.057$)、有意水準には達しなかった。これらの結果は、学齢期の初期段階における本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣が第 22 回調査時点の自尊感情に正の影響を及ぼす可能性を示唆している。

一方で、第7回、第8回調査時点で雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、自尊感情の得点が有意に低い傾向を示した(第7回調査時点: $B=-.157$ 、 $SE=.065$ 、 $p=.016$ 、第8回調査時点: $B=-.153$ 、 $SE=.069$ 、 $p=.026$)。この結果は、雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣が自尊感情に負の影響を及ぼす可能性を示唆している。

なお、第 10 回調査時点における本(小説や絵本など)、雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣は、いずれも自尊感情との有意な関連は認められなかった(本(小説や絵本など): $B=.133$ 、 $SE=.108$ 、 $p=.216$ 、雑誌・マンガ: $B=-.017$ 、 $SE=.078$ 、 $p=.827$)。

図表 2-2-3 第7回、第 8 回、第 10 回調査の読書習慣と自尊感情に関する回帰分析

| | 係数 | 標準誤差 |
|------------------------|----------|-------|
| 第7回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣 | 0.366 ** | 0.132 |
| 第7回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣 | -0.157 * | 0.065 |
| 第8回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣 | 0.249 | 0.131 |
| 第8回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣 | -0.153 * | 0.069 |
| 第10回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣 | 0.133 | 0.108 |
| 第10回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣 | -0.017 | 0.078 |
| n | 18,918 | |
| 修正済み決定係数 | 0.005 | |

*は5%、**は1%、***は0.1%水準で統計的有意を示す

<「がまん強さ(ねばり強さ)」に関する回帰分析>

「がまん強さ(ねばり強さ)」について、重回帰分析を行った結果、第7回調査時点で本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、がまん強さ(ねばり強さ)の得点が有意に高い傾向を示した($B=.424$ 、 $SE=.196$ 、 $p=.031$)。この結果は、学齢期の初期段階における本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣が第22回調査時点のがまん強さ(ねばり強さ)に正の影響を及ぼす可能性を示唆している。

一方で、第8回、第10回調査時点で雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、がまん強さ(ねばり強さ)の得点が有意に低い傾向を示した(第8回調査時点: $B=-.420$ 、 $SE=.102$ 、 $p<.001$ 、第10回調査時点: $B=-.543$ 、 $SE=.116$ 、 $p<.001$)。この結果は、雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣ががまん強さ(ねばり強さ)に負の影響を及ぼす可能性を示唆している。

なお、第8回、第10回調査時点における本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣は、いずれもがまん強さ(ねばり強さ)との有意な関連は認められなかった(第8回調査時点: $-.033$ 、 $SE=.195$ 、 $p=.865$ 、第10回調査時点: $B=-.107$ 、 $SE=.160$ 、 $p=.505$)。また、第7回調査時点における雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣もがまん強さ(ねばり強さ)との有意な関連は認められなかった($B=-.148$ 、 $SE=.096$ 、 $p=.124$)。

図表 2-2-4 第7回、第8回、第10回調査の読書習慣とがまん強さ(ねばり強さ)に関する回帰分析

| | 係数 | 標準誤差 |
|------------------------|------------|-------|
| 第7回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣 | 0.424 * | 0.196 |
| 第7回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣 | -0.148 | 0.096 |
| 第8回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣 | -0.033 | 0.195 |
| 第8回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣 | -0.420 *** | 0.102 |
| 第10回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣 | -0.107 | 0.160 |
| 第10回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣 | -0.543 *** | 0.116 |
| n | 18,817 | |
| 修正済み決定係数 | 0.005 | |

*は5%、**は1%、***は0.1%水準で統計的有意を示す

<「精神的回復力(レジリエンス)」に関する回帰分析>

「精神的回復力(レジリエンス)」について、重回帰分析を行った結果、第7回調査時点で本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、精神的回復力(レジリエンス)の得点が有意に高い傾向を示した($B=.690$ 、 $SE=.257$ 、 $p=.007$)。また、第8回調査時点においても同様の傾向がみてとれ($B=.840$ 、 $SE=.254$ 、 $p<.001$)、第10回調査時点においても同様の傾向がみてとれた($B=.503$ 、 $SE=.209$ 、 $p=.016$)。学齢期の初期から中期段階において、本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣が第22回調査時点の精神的回復力(レジリエンス)に正の影響を及ぼす可能性を示唆している。

一方で、第8回調査時点で雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、精神的回復力(レジリエンス)の得点が有意に低い傾向を示した($B=-.482$ 、 $SE=.134$ 、 $p<.001$)。

なお、第7回調査、第10回調査時点における雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣は、いずれも精神的回復力(レジリエンス)との有意な関連は認められなかった(第7回調査時点: $B=-.233$ 、 $SE=.126$ 、 $p=.065$ 、第10回調査時点: $B=-.212$ 、 $SE=.152$ 、 $p=.163$)。

図表 2-2-5 第7回、第8回、第10回調査の読書習慣と精神的回復力(レジリエンス)に関する回帰分析

| | 係数 | 標準誤差 |
|------------------------|------------|-------|
| 第7回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣 | 0.690 ** | 0.257 |
| 第7回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣 | -0.233 | 0.126 |
| 第8回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣 | 0.840 *** | 0.254 |
| 第8回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣 | -0.482 *** | 0.134 |
| 第10回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣 | 0.503 * | 0.209 |
| 第10回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣 | -0.212 | 0.152 |
| n | 18,651 | |
| 修正済み決定係数 | 0.004 | |

*は5%、**は1%、***は0.1%水準で統計的有意を示す

<「精神的健康」に関する回帰分析>

「精神的健康」について、重回帰分析を行った結果、第10回調査時点で本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、精神的健康の得点が有意に高い傾向を示した($B=.509$ 、 $SE=.162$ 、 $p=.002$)。この結果は、学齢期の中期段階における本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣が第22回調査時点の精神的健康に正の影響を及ぼす可能性を示唆している。

一方で、第8回調査時点で雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、精神的健康の得点が有意に低い傾向を示した($B=-.263$ 、 $SE=.103$ 、 $p=.011$)。

なお、その他の変数については、いずれも精神的健康との有意な関連は認められなかった。

図表 2-2-6 第7回、第8回、第10回調査の読書習慣と精神的健康に関する回帰分析

| | 係数 | 標準誤差 |
|------------------------|----------|-------|
| 第7回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣 | 0.369 | 0.198 |
| 第7回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣 | -0.083 | 0.098 |
| 第8回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣 | 0.273 | 0.197 |
| 第8回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣 | -0.263 * | 0.103 |
| 第10回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣 | 0.509 ** | 0.162 |
| 第10回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣 | -0.205 | 0.117 |
| n | 19,356 | |
| 修正済み決定係数 | 0.002 | |

*は5%、**は1%、***は0.1%水準で統計的有意を示す

(4)小括

本項では、成年期の非認知能力と、子供のころの読書習慣とその内容にどのような関連があるのかを確認するため、分析を行った。その結果、子供のころに本(小説や絵本など)の読書習慣がある場合と雑誌やマンガの読書習慣がある場合とで、成年期の非認知能力への影響に質的な違いがある可能性が示唆された。

自尊心に関しては、1か月に1冊以上本(小説や絵本など)を読む習慣がある子供において高い得点が認められ、物語読書が自尊心の向上に寄与する可能性が示唆された。対照的に、雑誌やマンガを読む習慣には負の関連が認められ、読書内容や形式が自尊心に与える影響に差異がある可能性が示された。

また、がまん強さ(ねばり強さ)についても、本(小説や絵本など)を読む習慣がある子供において高い得

点が認められ、物語読書が集中力や持続力等のがまん強さ(ねばり強さ)を育むことが示唆された。対照的に、雑誌やマンガを読む習慣では負の関連が認められ、読書スタイルの違いががまん強さ(ねばり強さ)の形成に与える影響に差異がある可能性が示された。

精神的回復力(レジリエンス)についても、本(小説や絵本など)を読む習慣がある子供において一貫して高い得点が認められ、物語読書が心理的柔軟性や適応力の向上につながる可能性が示唆された。一方、雑誌やマンガの読書習慣については負の関連が認められた。

最後に、精神的健康に関しては、本(小説や絵本など)を読む習慣がある子供において有意に高い得点が認められ、本(小説や絵本など)を読む習慣が精神的健康に貢献している可能性が示唆された。一方、雑誌やマンガの読書習慣については負の関連が認められた。

このように、小説や本を読む習慣が自尊感情、がまん強さ、精神的回復力、精神的健康の向上に寄与する可能性が示唆され、読書内容や形式の違いが成年期の非認知能力に異なる影響を与えることが確認できた。

3. 習い事に関する分析

(1)分析の背景・目的

教育振興基本計画では、前述のとおり、教育政策の目標の一つに「目標2 豊かな心の育成」が掲げられている。この目標の基本施策に「体験活動・交流活動の充実」や「伝統や文化等に関する教育の推進」などが挙げられている。また、教育政策の目標には「目標3 健やかな体の育成、スポーツを通じた豊かな心身の育成」も掲げられており、この目標では、「生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質・能力を育成するとともに、生活習慣の確立や学校保健の推進等により、心身の健康の増進と体力の向上を図る。」とされている。

子供のころの体験活動が子供のその後に与える影響に関しては、平成 13 年出生児縦断調査の結果を用いた分析がいくつか行われている。浜銀総合研究所(2021)⁹では、小学生のころの体験活動(自然体験、社会体験、文化的体験)が、体験によって結びつき方が一様ではないものの、その後の非認知能力等の向上に影響を与えていることが報告されている。また、浜銀総合研究所(2023)¹⁰においても、小学校高学年時点における各種体験活動の経験がその後の非認知能力等により影響を与えている可能性があることが報告されている。しかしながら、「体験活動」の内容は、学校行事以外で1年間に行った「自然体験」や「社会体験」、「文化的体験」であり、それらの体験内容には、定期的な体験活動にあたる習い事の内容は含まれていない。習い事には定期的なスポーツ体験や、音楽や絵画などの定期的な文化芸術活動があり、これらとその後の非認知能力の関連を確認することも有用と考える。

本項では、平成 13 年出生児縦断調査の第 22 回調査の非認知能力に関する項目と第3回、第6回、第12 回調査の習い事の内容に関する項目を用いて、成年期の非認知能力と定期的な体験活動の内容にどのような関連があるのかを分析することを目的とした。

(2)分析結果

①習い事の内容に関する回答

平成 13 年出生児縦断調査において、調査対象となっている子供の習い事に関する項目は、第3回から

⁹ 浜銀総合研究所(2021)「青少年の体験活動の推進に関する調査研究 報告書」(令和3年3月)

¹⁰ 浜銀総合研究所(2023)「21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)特別報告」(令和5年3月)

第12回調査の保護者調査で設定されている。具体的には、習い事を行っているかや習い事の内容などに関する回答を得ている。本項では、最も子供の年齢が低い時点の第3回調査、小学校入学前の第6回調査、中学校入学前の第12回調査時点で行っている習い事の内容に着目して分析を行うこととした。その際、習い事の内容を「スポーツ系」、「芸術系」、「教育系」、「その他」の4つに分類した。それぞれの分類に含まれる習い事の内容は図表2-3-1のとおりである。

図表2-3-1 第3回、第6回、第12回調査の習い事の内容(4分類)

| 調査回 | スポーツ系 | 芸術系 | 教育系 | その他 |
|------|--|--|--|-------|
| 第3回 | 「体操」 「バレエ」 「水泳」 | 「音楽(ピアノなど)」 「絵・工作」 | 「幼児教育」 「入園のための学習塾」 「英語」 | 「その他」 |
| 第6回 | 「体操」 「バレエ」 「水泳」 | 「習字」 「音楽(ピアノなど)」 「絵・工作」 | 「幼児教育」 「入園・入学のための学習塾」 「そろばん」 「英語」 | 「その他」 |
| 第12回 | 「体操」 「水泳」 「野球・ソフトボール」 「サッカー」 「テニス」 「剣道・柔道などの武術」 「バレエ、ダンス、舞踊」 | 「習字(硬筆含む)」 「音楽(ピアノなど)」 「絵・工作」 「華道・茶道」 | 「英会話(他の外国語を含む)」 「そろばん」 | 「その他」 |

各回の調査結果は図表2-3-2のとおりとなっている。スポーツ系の習い事をみると、第3回調査時点では3割台半ばとなっているが、第6回、第12回調査では半数以上となっている。芸術系の習い事は第3回調査時点では2割近くとなっているが、第6回、第12回調査では4割近くとなっている。教育系の習い事は第3回調査では半数以上となっているが、第6回、第12回調査では減少傾向にある。

なお、ここで示しているのは、各回で習い事を「している」と回答し、第22回調査に回答があった者に限った集計結果である。

図表 2-3-2 第3回、第6回、第12回調査の習い事の内容(4分類)の回答結果(多肢選択)

| | 上段:件数、下段:% | | | |
|-------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| | スポーツ系 | 芸術系 | 教育系 | その他 |
| 第3回調査 (n=3,274) | 1,108 33.8 | 560 17.1 | 1,778 54.3 | 335 10.2 |
| 第6回調査 (n=12,650) | 7,020 55.5 | 4,782 37.8 | 4,151 32.8 | 2,716 21.5 |
| 第12回調査 (n=16,471) | 9,810 59.6 | 7,464 45.3 | 4,632 28.1 | 2,791 14.3 |

②子供のころの習い事の内容と非認知能力の関連性

第3回、第6回、第12回調査の「子供の習い事の内容」と第22回調査の非認知能力に関する項目の関係を明確にするため、重回帰分析を行うこととした。なお、非認知能力に関する項目は、本章「2. 読書習慣に関する分析」と同様に、「自尊感情」、「がまん強さ(ねばり強さ)」、「精神的回復力(レジリエンス)」、「精神的健康」それぞれ得点指標を作成した。

分析においては、子供のころの習い事の内容がその後の非認知能力に影響しているかを明らかにするため、前述の第22回調査の非認知能力に関する項目の得点指標を従属変数とし、前述の第3回、第6回、第12回調査の「子供の習い事の内容(4分類)」を説明変数とした。独立変数とする第3回、第6回、第12回調査の「子供の習い事の内容(4分類)」は、各回、分類ごとに「行っている」を1、「行っていない」を0としたダミー変数を投入し、分析を行った。

<「自尊感情」に関する回帰分析>

「自尊感情」について、重回帰分析を行った結果、第6回調査時点でスポーツ系の習い事、芸術系の習い事を行っていた子供は、自尊感情の得点が有意に高い傾向を示した(スポーツ系:B=.560、SE=.177、p=.002、芸術系:B=.378、SE=.177、p=.033)。第12回調査時点においてもスポーツ系の習い事を行っていた子供は同様の傾向がみとれた(B=.490、SE=.184、p=.008)。これらの結果は、学齢期の初期段階から中期段階における定期的なスポーツ体験や芸術体験が第22回調査時点の自尊感情に正の影響を及ぼす可能性を示唆している。

なお、その他の変数については、いずれも自尊感情との有意な関連は認められなかった。

図表 2-3-3 第3回、第6回、第12回調査の習い事の内容と自尊感情に関する回帰分析

| | 係数 | 標準誤差 |
|--------------------------|----------|-------|
| 第3回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている | 0.149 | 0.236 |
| 第3回調査時点で芸術系の習い事を行っている | 0.289 | 0.265 |
| 第3回調査時点で教育系の習い事を行っている | 0.133 | 0.243 |
| 第3回調査時点でその他の習い事を行っている | -0.501 | 0.320 |
| 第6回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている | 0.560 ** | 0.177 |
| 第6回調査時点で芸術系の習い事を行っている | 0.378 * | 0.177 |
| 第6回調査時点で教育系の習い事を行っている | 0.072 | 0.175 |
| 第6回調査時点でその他の習い事を行っている | 0.389 | 0.202 |
| 第12回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている | 0.490 ** | 0.184 |
| 第12回調査時点で芸術系の習い事を行っている | -0.029 | 0.181 |
| 第12回調査時点で教育系の習い事を行っている | 0.249 | 0.170 |
| 第12回調査時点でその他の習い事を行っている | 0.351 | 0.240 |
| n | 18,918 | |
| 修正済み決定係数 | 0.011 | |

*は5%、**は1%、***は0.1%水準で統計的有意を示す

<「がまん強さ(ねばり強さ)」に関する回帰分析>

「がまん強さ(ねばり強さ)」について、重回帰分析を行った結果、第12回調査時点でスポーツ系の習い事を行っていた子供は、がまん強さ(ねばり強さ)の得点が有意に高い傾向を示した($B=0.560$ 、 $SE=0.278$ 、 $p=0.044$)。この結果は、学齢期の中期段階における定期的なスポーツ体験が第22回調査時点のがまん強さ(ねばり強さ)に正の影響を及ぼす可能性を示唆している。

なお、その他の変数については、いずれもがまん強さ(ねばり強さ)との有意な関連は認められなかった。

図表 2-3-4 第3回、第6回、第12回調査の習い事の内容とがまん強さ(ねばり強さ)に関する回帰分析

| | 係数 | 標準誤差 |
|--------------------------|---------|-------|
| 第3回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている | -0.083 | 0.356 |
| 第3回調査時点で芸術系の習い事を行っている | 0.139 | 0.398 |
| 第3回調査時点で教育系の習い事を行っている | 0.072 | 0.366 |
| 第3回調査時点でその他の習い事を行っている | 0.165 | 0.484 |
| 第6回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている | -0.171 | 0.268 |
| 第6回調査時点で芸術系の習い事を行っている | 0.053 | 0.268 |
| 第6回調査時点で教育系の習い事を行っている | -0.220 | 0.266 |
| 第6回調査時点でその他の習い事を行っている | -0.201 | 0.306 |
| 第12回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている | 0.560 * | 0.278 |
| 第12回調査時点で芸術系の習い事を行っている | 0.001 | 0.274 |
| 第12回調査時点で教育系の習い事を行っている | 0.127 | 0.257 |
| 第12回調査時点でその他の習い事を行っている | 0.268 | 0.363 |
| n | 18,817 | |
| 修正済み決定係数 | -0.003 | |

*は5%、**は1%、***は0.1%水準で統計的有意を示す

<「精神的回復力(レジリエンス)」に関する回帰分析>

「精神的回復力(レジリエンス)」について、重回帰分析を行った結果、第6回、第12回調査時点でスポーツ系の習い事を行っていた子供は、精神的回復力(レジリエンス)の得点が有意に高い傾向を示した(第6回調査時点:B=.949、SE=.341、p=.005、第12回調査時点:B=1.019、SE=.353、p=.004)。これらの結果は、学齢期の初期段階から中期段階における定期的なスポーツ体験が第22回調査時点の精神的回復力(レジリエンス)に正の影響を及ぼす可能性を示唆している。

なお、その他の変数については、いずれも精神的回復力(レジリエンス)との有意な関連は認められなかった。

図表 2-3-5 第3回、第6回、第12回調査の習い事の内容と精神的回復力(レジリエンス)に関する回帰分析

| | 係数 | 標準誤差 |
|--------------------------|----------|-------|
| 第3回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている | -0.508 | 0.452 |
| 第3回調査時点で芸術系の習い事を行っている | 0.143 | 0.506 |
| 第3回調査時点で教育系の習い事を行っている | -0.269 | 0.465 |
| 第3回調査時点でその他の習い事を行っている | -0.503 | 0.616 |
| 第6回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている | 0.949 ** | 0.341 |
| 第6回調査時点で芸術系の習い事を行っている | 0.594 | 0.342 |
| 第6回調査時点で教育系の習い事を行っている | 0.179 | 0.337 |
| 第6回調査時点でその他の習い事を行っている | 0.405 | 0.388 |
| 第12回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている | 1.019 ** | 0.353 |
| 第12回調査時点で芸術系の習い事を行っている | 0.131 | 0.349 |
| 第12回調査時点で教育系の習い事を行っている | 0.375 | 0.327 |
| 第12回調査時点でその他の習い事を行っている | 0.368 | 0.461 |
| n | 18,651 | |
| 修正済み決定係数 | 0.005 | |

*は5%、**は1%、***は0.1%水準で統計的有意を示す

<「精神的健康」に関する回帰分析>

「精神的健康」について、重回帰分析を行った結果、第6回調査時点でスポーツ系の習い事を行っていた子供は、精神的健康の得点が有意に高い傾向を示した($B=.863$ 、 $SE=.258$ 、 $p<.001$)。この結果は、学齢期の初期段階における定期的なスポーツ体験が第 22 回調査時点の精神的健康に正の影響を及ぼす可能性を示唆している。

なお、その他の変数については、いずれも精神的健康との有意な関連は認められなかった。

図表 2-3-6 第3回、第6回、第12回調査の習い事の内容と精神的健康に関する回帰分析

| | 係数 | 標準誤差 |
|--------------------------|-----------|-------|
| 第3回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている | 0.097 | 0.343 |
| 第3回調査時点で芸術系の習い事を行っている | 0.204 | 0.384 |
| 第3回調査時点で教育系の習い事を行っている | 0.525 | 0.353 |
| 第3回調査時点でその他の習い事を行っている | 0.005 | 0.467 |
| 第6回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている | 0.863 *** | 0.258 |
| 第6回調査時点で芸術系の習い事を行っている | 0.442 | 0.258 |
| 第6回調査時点で教育系の習い事を行っている | -0.319 | 0.255 |
| 第6回調査時点でその他の習い事を行っている | 0.106 | 0.293 |
| 第12回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている | 0.381 | 0.267 |
| 第12回調査時点で芸術系の習い事を行っている | 0.151 | 0.264 |
| 第12回調査時点で教育系の習い事を行っている | 0.103 | 0.247 |
| 第12回調査時点でその他の習い事を行っている | -0.174 | 0.350 |
| n | 19,356 | |
| 修正済み決定係数 | 0.005 | |

*は5%、**は1%、***は0.1%水準で統計的有意を示す

(3)小括

本項では、成年期の非認知能力と定期的な体験活動である習い事の内容にどのような関連があるのかを確認するため、分析を行った。その結果、スポーツ系の習い事の経験が成年期の非認知能力に影響を与えている可能性が示唆された。

自尊感情に関しては、第 6 回、第 12 回調査時点においてスポーツ系の習い事を行っていた子供において高い得点が認められた。また、第 6 回調査時点において芸術系の習い事を行っていた子供においても、自尊感情の得点が高い傾向が認められた。これにより、学齢期の初期段階から中期段階においてスポーツや芸術に関する定期的な体験活動が自尊感情の向上に寄与する可能性が示唆された。

がまん強さ(ねばり強さ)については、第 12 回調査時点でスポーツ系の習い事を行っていた子供において高い得点が認められた。スポーツ活動における反復練習や困難な状況への対処ががまん強さ(ねばり強さ)を育むことが示唆された。

精神的回復力(レジリエンス)についても、第 6 回、第 12 回調査時点でスポーツ系の習い事を行っていた子供において高い得点が認められた。スポーツ経験が心理的柔軟性や適応力の向上に寄与する可能性が示唆された。

最後に、精神的健康に関しても、第 6 回調査時点においてスポーツ系の習い事を行っていた子供において高い得点が認められた。定期的な身体活動が精神的健康の維持・向上に寄与している可能性が示唆された。

このように、スポーツ系の習い事の経験が自尊感情、がまん強さ、精神的回復力、精神的健康の向上に寄与する可能性が示唆された。しかし、習い事の状態に関しては、保護者の経済状況や教育感のほか、居住地域といった環境の影響も大きいことが考えられる。そのため、家庭環境や背景要因への配慮も欠かせないといえる。

平成 13 年出生児縦断調査には、小学校など、学齢期初期段階から中期段階における学校での体験活動の状況を確認している調査項目はない。しかし、その学齢期初期段階から中期段階における学校での体験活動の状況が非認知能力に与える影響について分析を行うことができると、より教育政策に資する分析につなげることができると考える。

4. 就職活動の結果に関する分析

(1)分析の背景・目的

平成13年出生児縦断調査は、前述のとおり、第22回調査の結果までが公表されている。第22回調査は、調査対象者が22歳の時点の調査であり、4年制大学に進学している調査対象者は、浪人や休学、留年等をしていない場合は大学4年生の時点となる。第21回、第22回調査では、就職活動に関する項目を設置しており、就職活動の結果に関する分析を行える状況にある。

本項では、内々定を得ている回答者と得ていない回答者、内々定の企業数が多い回答者と少ない回答者など、それぞれの特徴をどのような特徴があるのか、非認知能力に関する項目との関連をみることで確認することとした。

(2)分析対象

第22回調査の結果を用いて分析を行うにあたり、下記の条件に該当する回答者を第22回調査時点で4年制大学に通っており、就職活動を行っている回答者として分析対象にした。

条件に該当する回答者は7,416名であった。

図表 2-4-1 就職活動を行っている回答者の条件

| 調査回 | 条件 |
|------|--|
| 第21回 | ・第21回調査時点で、過去1年間に何かしらの就職活動を行ったと回答している(問17 就職活動の状況の問いで、1つ以上「1 行った」と回答している) |
| 第22回 | ・第22回調査時点で在学している(問10 現在の状況の問いで、「1」～「3」のいずれかと回答している) ・第22回調査時点で通っている学校の種類が大学(問11② 通っている学校の種類の問いで、「1」と回答している) ・第22回調査時点で過去に休学しておらず、今も休学していない(問11⑦ 休学の状況の問いで、「3」と回答している) ・第22回調査時点で、過去1年間に何かしらの就職活動を行ったと回答している(問18 就職活動の状況の問いで、1つ以上「1 行った」と回答している) |

(3)分析結果

①就職活動の結果に関する回答結果

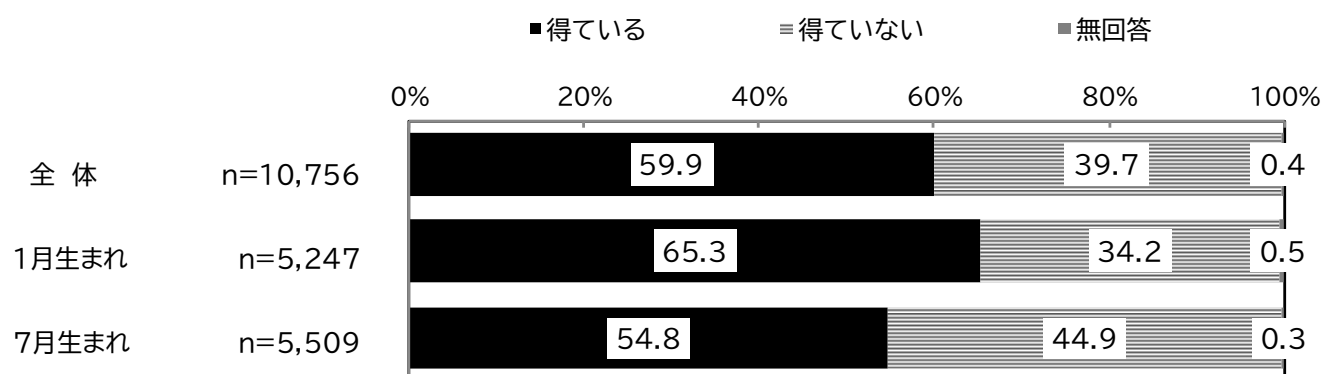
分析対象となった回答者の就職活動の結果に関する項目を集計した。

なお、平成13年出生児縦断調査の調査対象は、全国の平成13年に出生した子供のうち、1月10日～17日の間に出生した子(1月生まれ)と、7月10日～17日の間に出生した子(7月生まれ)である。調査時期は、1月生まれが令和4年12月19日～令和5年3月5日、7月生まれが令和5年7月10日～令和5年10月15日であるため、1月生まれの回答者は卒業年次の12～3月、7月生まれの回答者は卒業年次の7～10月に回答した情報となる。そのため、一部の集計は1月生まれの回答者と7月生まれの回答者を分けて集計を行った。

<内々定の状況>

内々定の状況は、全体で「得ている」が59.9%となっており、6割近くの回答者が内々定を得ていることが分かった。調査時期別でみると、1月生まれで「得ている」が65.3%、7月生まれで「得ている」が54.8%となっている。

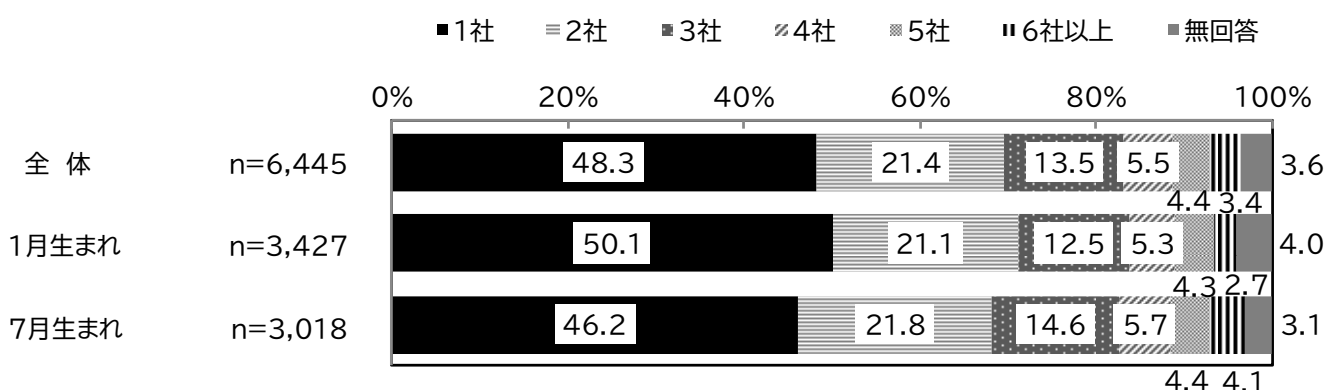
図表 2-4-2 内々定の状況



<内々定企業数>

内々定企業数は、全体で「1社」が 48.3%と最も多い割合を占めており、「2社」が 21.4%、「3社」が 13.5%となっており、平均内々定企業数は 2.09 社となっていた。調査時期別でみると、1月生まれ、7月生まれともに、「1社」が最も多い割合を占めており、1月生まれは 50.1%、7月生まれは 46.2%となっている。なお、平均内々定企業数は1月生まれが 2.02 社、7月生まれが 2.17 社となっていた。

図表 2-4-3 内々定企業数



<内々定を受けた時期>

内々定を受けた時期は、全体で「卒業年次の6月」が 17.8%と最も多い割合を占めている。6月までに内々定を得ている割合は 70.6%、7月以降に内々定を受けている割合は 28.8%となっていた。調査時期別でみると、1月生まれ、7月生まれともに、「卒業年次の6月」が最も多い割合を占めており、1月生まれは 14.4%、7月生まれは 21.8%となっている。なお、6月までに内々定を得ている割合は1月生まれが 62.1%、7月生まれが 79.9%となっており、7月以降に内々定を受けている割合は1月生まれが 37.0%、7月生まれが 19.2%となっている。

図表 2-4-4 内々定を受けた時期

| | 卒業年次前年 9月以前 | 上段:件数、下段:% | | | | | | | | | | | | | 無回答 |
|----------------|----------------|------------|-----------|------------|-----------|------------|------------|-------------|-------------|---------------|-------------|------------|------------|-------------|-----------|
| | | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 卒業年次 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月以降 | |
| 全体(n=6,445) | 489 7.6 | 126 2.0 | 81 1.3 | 133 2.1 | 88 1.4 | 155 2.4 | 462 7.2 | 870 13.5 | 988 15.3 | 1,150 17.8 | 642 10.0 | 417 6.5 | 320 5.0 | 470 7.3 | 54 0.8 |
| 1月生まれ(n=3,427) | 290 8.5 | 90 2.6 | 69 2.0 | 90 2.6 | 54 1.6 | 65 1.9 | 182 5.3 | 392 11.4 | 405 11.8 | 492 14.4 | 279 8.1 | 295 8.6 | 263 7.7 | 432 12.6 | 29 0.8 |
| 7月生まれ(n=3,018) | 199 6.6 | 36 1.2 | 12 0.4 | 43 1.4 | 34 1.1 | 90 3.0 | 280 9.3 | 478 15.8 | 583 19.3 | 658 21.8 | 363 12.0 | 122 4.0 | 57 1.9 | 38 1.3 | 25 0.8 |

②就職活動の結果と非認知能力の関連性

①で算出した「内々定の状況」、「内々定企業数」と第22回調査の非認知能力に関する項目の関連性を確認するため、クロス集計を行った。本項で就職活動の結果との関連性を確認する非認知能力に関する項目は、「自尊感情」、「がまん強さ(ねばり強さ)」、「精神的回復力(レジリエンス)」とした。なお、本項では「内々定の状況」、「内々定企業数」それぞれ無回答(不詳)であった場合には、集計の対象外とした。また、1月調査の回答と7月調査の回答の結果は合算した結果である。

<内々定の状況に関するクロス集計(自尊感情別)>

内々定の状況を自尊感情に関する項目別でクロス集計した結果は、図表 2-4-5 のとおりとなっている。

結果として、どの自尊感情に関する項目も有意な差が確認された。内々定を「得ている」回答者は、「色々な良い素質を持っている」、「物事を人並みには、うまくやれる」、「自分に対して肯定的である」、「だいたいにおいて、自分に満足している」で「とてもあてはまる」と回答している割合が7割台半ばを占めている。一方、内々定を「得ていない」回答者は、「だいたいにおいて、自分に満足している」、「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」で「まったくあてはまらない」と回答している割合が4割台半ばを占めている。

この結果から、内々定を得ている回答者は自尊感情が高く、内々定を得ていない回答者は自尊感情が低い傾向がみてとれた。

図表 2-4-5 内々定の状況に関するクロス集計(自尊感情別)

色々な良い素質を持っている

物事を人並みには、うまくやれる

| | 上段:件数、下段:% | | | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|---------------|-------------|--------------------|---------------|---------------|
| | 得ている | 得ていない | | 得ている | 得ていない |
| とてもあてはまる(n=1,049) | 772 73.6 | 277 26.4 | とてもあてはまる(n=1,304) | 970 74.4 | 334 25.6 |
| ややあてはまる(n=3,115) | 2,253 72.3 | 862 27.7 | ややあてはまる(n=3,857) | 2,830 73.4 | 1,027 26.6 |
| どちらともいえない(n=1,713) | 1,207 70.5 | 506 29.5 | どちらともいえない(n=1,254) | 845 67.4 | 409 32.6 |
| あまりあてはまらない(n=1,180) | 786 66.6 | 394 33.4 | あまりあてはまらない(n=789) | 471 59.7 | 318 40.3 |
| まったくあてはまらない(n=260) | 158 60.8 | 102 39.2 | まったくあてはまらない(n=174) | 103 59.2 | 71 40.8 |

カイ二乗検定:p<0.001

カイ二乗検定:p<0.001

図表 2-4-5 内々定の状況に関するクロス集計(自尊感情別)(続き)

自分には、自慢できるところがあまりない

自分に対して肯定的である

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い |
| とてもあてはまる(n=575) | 359 62.4 | 216 37.6 |
| ややあてはまる(n=2,018) | 1,410 69.9 | 608 30.1 |
| どちらともいえない(n=1,838) | 1,310 71.3 | 528 28.7 |
| あまりあてはまらない(n=2,375) | 1,738 73.2 | 637 26.8 |
| まったくあてはまらない(n=559) | 394 70.5 | 165 29.5 |

カイ二乗検定:p<0.001

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い |
| とてもあてはまる(n=1,074) | 784 73.0 | 290 27.0 |
| ややあてはまる(n=2,708) | 1,955 72.2 | 753 27.8 |
| どちらともいえない(n=1,754) | 1,255 71.6 | 499 28.4 |
| あまりあてはまらない(n=1,463) | 981 67.1 | 482 32.9 |
| まったくあてはまらない(n=371) | 238 64.2 | 133 35.8 |

カイ二乗検定:p<0.001

だいたいにおいて、自分に満足している

もっと自分自身を尊敬できるようになりたい

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い |
| とてもあてはまる(n=1,083) | 794 73.3 | 289 26.7 |
| ややあてはまる(n=2,976) | 2,190 73.6 | 786 26.4 |
| どちらともいえない(n=1,591) | 1,103 69.3 | 488 30.7 |
| あまりあてはまらない(n=1,364) | 920 67.4 | 444 32.6 |
| まったくあてはまらない(n=353) | 199 56.4 | 154 43.6 |

カイ二乗検定:p<0.001

| | 上段:件数、下段:% | |
|--------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い |
| とてもあてはまる(n=2,266) | 1,616 71.3 | 650 28.7 |
| ややあてはまる(n=2,965) | 2,125 71.7 | 840 28.3 |
| どちらともいえない(n=1,283) | 904 70.5 | 379 29.5 |
| あまりあてはまらない(n=686) | 473 69.0 | 213 31.0 |
| まったくあてはまらない(n=175) | 99 56.6 | 76 43.4 |

カイ二乗検定:p<0.001

<内々定の状況に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)>

内々定の状況をがまん強さ(ねばり強さ)に関する項目別でクロス集計した結果は、図表 2-4-6 のとおりとなっている。

結果として、どのがまん強さ(ねばり強さ)に関する項目も有意な差が確認された。内々定を「得ている」回答者は、「新しいアイデアや計画によって、それまで取り組んでいたことから注意がそれることがある」で「全くあてはまらない」と回答している割合が7割台半ば、「始めたことは、どんなことでも最後までやりとげる」で「非常にあてはまる」と回答している割合が7割台半ばを占めている。一方、内々定を「得ていない」回答者は、「私は頑張り屋だ」、「始めたことは、どんなことでも最後までやりとげる」で「全くあてはまらない」と回答している割合が4割台半ばを占めている。

この結果から、内々定を得ている回答者はがまん強さ(ねばり強さ)の割合が高く、内々定を得ていない回答者はがまん強さ(ねばり強さ)の割合が低い傾向がみてとれた。

図表 2-4-6 内々定の状況に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)

新しいアイデアや計画によって、それまで取り組んでいたことから注意がそれることがある

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|---------------|-------------|
| | 得て いる | 得て いない |
| 非常にあてはまる(n=569) | 360 63.3 | 209 36.7 |
| かなりあてはまる(n=1,508) | 1,019 67.6 | 489 32.4 |
| 少しあてはまる(n=2,985) | 2,159 72.3 | 826 27.7 |
| あまりあてはまらない(n=2,117) | 1,533 72.4 | 584 27.6 |
| 全くあてはまらない(n=208) | 152 73.1 | 56 26.9 |

カイ二乗検定:p<0.001

あるアイデアや計画に一時的に夢中になっても、あとで興味を失うことがある

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|---------------|-------------|
| | 得て いる | 得て いない |
| 非常にあてはまる(n=758) | 500 66.0 | 258 34.0 |
| かなりあてはまる(n=1,868) | 1,320 70.7 | 548 29.3 |
| 少しあてはまる(n=3,011) | 2,184 72.5 | 827 27.5 |
| あまりあてはまらない(n=1,571) | 1,093 69.6 | 478 30.4 |
| 全くあてはまらない(n=165) | 114 69.1 | 51 30.9 |

カイ二乗検定:p<0.01

目標を決めても、後から変えてしまうことがよくある

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|---------------|-------------|
| | 得て いる | 得て いない |
| 非常にあてはまる(n=549) | 350 63.8 | 199 36.2 |
| かなりあてはまる(n=1,753) | 1,190 67.9 | 563 32.1 |
| 少しあてはまる(n=2,804) | 2,046 73.0 | 758 27.0 |
| あまりあてはまらない(n=2,049) | 1,475 72.0 | 574 28.0 |
| 全くあてはまらない(n=216) | 148 68.5 | 68 31.5 |

カイ二乗検定:p<0.001

困難があっても、私はやる気を失わない

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|---------------|-------------|
| | 得て いる | 得て いない |
| 非常にあてはまる(n=581) | 421 72.5 | 160 27.5 |
| かなりあてはまる(n=1,850) | 1,374 74.3 | 476 25.7 |
| 少しあてはまる(n=2,714) | 1,944 71.6 | 770 28.4 |
| あまりあてはまらない(n=2,008) | 1,338 66.6 | 670 33.4 |
| 全くあてはまらない(n=226) | 138 61.1 | 88 38.9 |

カイ二乗検定:p<0.001

私は頑張り屋だ

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|---------------|-------------|
| | 得て いる | 得て いない |
| 非常にあてはまる(n=1,043) | 766 73.4 | 277 26.6 |
| かなりあてはまる(n=2,028) | 1,507 74.3 | 521 25.7 |
| 少しあてはまる(n=2,636) | 1,895 71.9 | 741 28.1 |
| あまりあてはまらない(n=1,397) | 900 64.4 | 497 35.6 |
| 全くあてはまらない(n=265) | 142 53.6 | 123 46.4 |

カイ二乗検定:p<0.001

数ヶ月以上かかるような計画に集中して取り組み続けることは難しい

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|---------------|-------------|
| | 得て いる | 得て いない |
| 非常にあてはまる(n=700) | 419 59.9 | 281 40.1 |
| かなりあてはまる(n=1,504) | 1,031 68.6 | 473 31.4 |
| 少しあてはまる(n=2,260) | 1,637 72.4 | 623 27.6 |
| あまりあてはまらない(n=2,460) | 1,810 73.6 | 650 26.4 |
| 全くあてはまらない(n=449) | 316 70.4 | 133 29.6 |

カイ二乗検定:p<0.001

図表 2-4-6 内々定の状況に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)(続き)

始めたことは、どんなことでも最後までやりとげる

私は精魂傾けてものごとに取り組む

| | 上段:件数、下段:% | | | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|------------------|-----------------------|---------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い | | 得 て い る | 得 て い な い |
| 非常にあてはまる(n=894) | 653 73.0 | 241 27.0 | 非常にあてはまる(n=693) | 488 70.4 | 205 29.6 |
| かなりあてはまる(n=2,168) | 1,581 72.9 | 587 27.1 | かなりあてはまる(n=1,992) | 1,451 72.8 | 541 27.2 |
| 少しあてはまる(n=2,795) | 2,003 71.7 | 792 28.3 | 少しあてはまる(n=3,007) | 2,171 72.2 | 836 27.8 |
| あまりあてはまらない(n=1,335) | 876 65.6 | 459 34.4 | あまりあてはまらない(n=1,495) | 985 65.9 | 510 34.1 |
| 全くあてはまらない(n=188) | 103 54.8 | 85 45.2 | 全くあてはまらない(n=169) | 104 61.5 | 65 38.5 |

カイ二乗検定:p<0.001

カイ二乗検定:p<0.001

<内々定の状況に関するクロス集計(精神的回復力(レジリエンス)別)>

内々定の状況を精神的回復力(レジリエンス)に関する項目別でクロス集計した結果は、図表 2-4-7 のとおりとなっている。

結果として、「自分の感情をコントロールできる方だ」、「自分の未来にはきっといいことがあると思う」、「動揺しても、自分を落ち着かせることができる」、「将来の見通しは明るいと思う」、「自分の将来に希望をもっている」で有意な差が確認された。内々定を「得ている」回答者は、「自分の感情をコントロールできる方だ」「動揺しても、自分を落ち着かせることができる」、「将来の見通しは明るいと思う」で「はい」と回答した割合が7割台半ばを占めている。一方、内々定を「得ていない」回答者は、「将来の見通しは明るいと思う」、「自分の将来に希望をもっている」で「いいえ」と回答した割合が4割台半ばを占めている。

この結果から、内々定を得ている回答者は精神的回復力(レジリエンス)が高く、内々定を得ていない回答者は精神的回復力(レジリエンス)が低い傾向がみてとれた。

図表 2-4-7 内々定の状況に関するクロス集計(精神的回復力(レジリエンス)別)

色々なことにチャレンジするのが好きだ

| | 上段:件数、下段:% | |
|----------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い |
| いいえ(n=293) | 193 65.9 | 100 34.1 |
| どちらかというといいえ(n=1,176) | 821 69.8 | 355 30.2 |
| どちらでもない(n=1,204) | 847 70.3 | 357 29.7 |
| どちらかというとはい(n=2,829) | 2,016 71.3 | 813 28.7 |
| はい(n=1,877) | 1,339 71.3 | 538 28.7 |

カイ二乗検定:p>0.05(ns)

自分の感情をコントロールできる方だ

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い |
| いいえ(n=256) | 161 62.9 | 95 37.1 |
| どちらかというといいえ(n=938) | 627 66.8 | 311 33.2 |
| どちらでもない(n=1,082) | 737 68.1 | 345 31.9 |
| どちらかというとはい(n=3,022) | 2,165 71.6 | 857 28.4 |
| はい(n=2,068) | 1,518 73.4 | 550 26.6 |

カイ二乗検定:p<0.001

自分の未来にはきっといいことがあると思う

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い |
| いいえ(n=264) | 150 56.8 | 114 43.2 |
| どちらかというといいえ(n=625) | 397 63.5 | 228 36.5 |
| どちらでもない(n=1,496) | 993 66.4 | 503 33.6 |
| どちらかというとはい(n=2,680) | 1,999 74.6 | 681 25.4 |
| はい(n=2,292) | 1,663 72.6 | 629 27.4 |

カイ二乗検定:p<0.001

新しいことや珍しいことが好きだ

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い |
| いいえ(n=161) | 111 68.9 | 50 31.1 |
| どちらかというといいえ(n=764) | 556 72.8 | 208 27.2 |
| どちらでもない(n=1,290) | 910 70.5 | 380 29.5 |
| どちらかというとはい(n=2,832) | 2,017 71.2 | 815 28.8 |
| はい(n=2,315) | 1,606 69.4 | 709 30.6 |

カイ二乗検定:p>0.05(ns)

動揺しても、自分を落ち着かせることができる

| | 上段:件数、下段:% | |
|----------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い |
| いいえ(n=287) | 185 64.5 | 102 35.5 |
| どちらかというといいえ(n=1,209) | 784 64.8 | 425 35.2 |
| どちらでもない(n=1,387) | 968 69.8 | 419 30.2 |
| どちらかというとはい(n=3,130) | 2,280 72.8 | 850 27.2 |
| はい(n=1,346) | 985 73.2 | 361 26.8 |

カイ二乗検定:p<0.001

将来の見通しは明るいと思う

| | 上段:件数、下段:% | |
|----------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い |
| いいえ(n=456) | 253 55.5 | 203 44.5 |
| どちらかというといいえ(n=1,021) | 649 63.6 | 372 36.4 |
| どちらでもない(n=1,878) | 1,280 68.2 | 598 31.8 |
| どちらかというとはい(n=2,536) | 1,922 75.8 | 614 24.2 |
| はい(n=1,467) | 1,100 75.0 | 367 25.0 |

カイ二乗検定:p<0.001

図表 2-4-7 内々定の状況に関するクロス集計(精神的回復力(レジリエンス)別)(続き)

ものごとに対する興味や関心が強い方だ

怒りを感じるとおさえられなくなる

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い |
| いいえ(n=141) | 95 67.4 | 46 32.6 |
| どちらかというといいえ(n=757) | 520 68.7 | 237 31.3 |
| どちらでもない(n=1,238) | 882 71.2 | 356 28.8 |
| どちらかというとはい(n=3,057) | 2,174 71.1 | 883 28.9 |
| はい(n=2,164) | 1,527 70.6 | 637 29.4 |

カイ二乗検定:p>0.05(ns)

| | 上段:件数、下段:% | |
|----------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い |
| いいえ(n=2,327) | 1,659 71.3 | 668 28.7 |
| どちらかというといいえ(n=2,557) | 1,814 70.9 | 743 29.1 |
| どちらでもない(n=1,290) | 908 70.4 | 382 29.6 |
| どちらかというとはい(n=938) | 654 69.7 | 284 30.3 |
| はい(n=260) | 180 69.2 | 80 30.8 |

カイ二乗検定:p>0.05(ns)

自分の将来に希望をもっている

| | 上段:件数、下段:% | |
|---------------------|------------------|-----------------------|
| | 得 て い る | 得 て い な い |
| いいえ(n=434) | 235 54.1 | 199 45.9 |
| どちらかというといいえ(n=890) | 571 64.2 | 319 35.8 |
| どちらでもない(n=1,618) | 1,124 69.5 | 494 30.5 |
| どちらかというとはい(n=2,763) | 2,067 74.8 | 696 25.2 |
| はい(n=1,656) | 1,207 72.9 | 449 27.1 |

カイ二乗検定:p<0.001

<内々定企業数に関するクロス集計(自尊感情別)>

内々定企業数を自尊感情に関する項目別でクロス集計した結果は、図表 2-4-8 のとおりとなっている。内々定企業数は、「1社」、「2社」、「3社」、「4社」、「5社」、「6社以上」の選択肢を設置し、回答を得ているが、本項では、「4社」、「5社」、「6社以上」の回答を合算し、「4社以上」としてクロス集計を行った。

結果として、「色々な良い素質を持っている」、「物事を人並みには、うまくやれる」、「自分には、自慢できるところがあまりない」、「自分に対して肯定的である」で有意な差が確認された。内々定企業数が「4社以上」の回答者は、「色々な良い素質を持っている」、「物事を人並みには、うまくやれる」、「自分に対して肯定的である」で「とてもあてはまる」と回答している割合が2割近く、「自分には自慢できるところがあまりない」

で「まったくあてはまらない」と回答している割合が2割近くを占めている。一方、内々定企業数が「1社」の回答者は、「色々な良い素質を持っている」、「物事を人並みには、うまくやれる」で「まったくあてはまらない」と回答している割合が6割を占めている。

図表 2-4-8 内々定企業数に関するクロス集計(自尊感情別)

色々な良い素質を持っている

上段:件数、下段:%

| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
|--------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| とてもあてはまる(n=754) | 317 42.0 | 174 23.1 | 120 15.9 | 143 19.0 |
| ややあてはまる(n=2,198) | 998 45.4 | 502 22.8 | 345 15.7 | 353 16.1 |
| どちらともいえない(n=1,148) | 573 49.9 | 270 23.5 | 162 14.1 | 143 12.5 |
| あまりあてはまらない(n=774) | 403 52.1 | 171 22.1 | 107 13.8 | 93 12.0 |
| まったくあてはまらない(n=156) | 95 60.9 | 30 19.2 | 14 9.0 | 17 10.9 |

カイ二乗検定:p<0.001

物事を人並みには、うまくやれる

上段:件数、下段:%

| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
|--------------------|---------------|-------------|-------------|-------------|
| とてもあてはまる(n=951) | 405 42.6 | 204 21.5 | 169 17.8 | 173 18.2 |
| ややあてはまる(n=2,751) | 1,259 45.8 | 673 24.5 | 407 14.8 | 412 15.0 |
| どちらともいえない(n=803) | 420 52.3 | 167 20.8 | 114 14.2 | 102 12.7 |
| あまりあてはまらない(n=466) | 259 55.6 | 101 21.7 | 52 11.2 | 54 11.6 |
| まったくあてはまらない(n=100) | 60 60.0 | 18 18.0 | 10 10.0 | 12 12.0 |

カイ二乗検定:p<0.001

自分には、自慢できるところがあまりない

上段:件数、下段:%

| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
|---------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| とてもあてはまる(n=354) | 182 51.4 | 74 20.9 | 42 11.9 | 56 15.8 |
| ややあてはまる(n=1,377) | 649 47.1 | 330 24.0 | 221 16.0 | 177 12.9 |
| どちらともいえない(n=1,245) | 630 50.6 | 269 21.6 | 181 14.5 | 165 13.3 |
| あまりあてはまらない(n=1,701) | 771 45.3 | 396 23.3 | 248 14.6 | 286 16.8 |
| まったくあてはまらない(n=389) | 169 43.4 | 91 23.4 | 60 15.4 | 69 17.7 |

カイ二乗検定:p<0.05

図表 2-4-8 内々定企業数に関するクロス集計(自尊感情別)(続き)

自分に対して肯定的である

上段:件数、下段:%

| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
|--------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| とてもあてはまる(n=772) | 341 44.2 | 186 24.1 | 114 14.8 | 131 17.0 |
| ややあてはまる(n=1,906) | 881 46.2 | 421 22.1 | 291 15.3 | 313 16.4 |
| どちらともいえない(n=1,199) | 596 49.7 | 292 24.4 | 164 13.7 | 147 12.3 |
| あまりあてはまらない(n=953) | 469 49.2 | 210 22.0 | 150 15.7 | 124 13.0 |
| まったくあてはまらない(n=234) | 114 48.7 | 48 20.5 | 33 14.1 | 39 16.7 |

カイ二乗検定:p<0.05

だいたいにおいて、自分に満足している

上段:件数、下段:%

| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
|--------------------|---------------|-------------|-------------|-------------|
| とてもあてはまる(n=782) | 352 45.0 | 183 23.4 | 117 15.0 | 130 16.6 |
| ややあてはまる(n=2,138) | 1,003 46.9 | 487 22.8 | 310 14.5 | 338 15.8 |
| どちらともいえない(n=1,045) | 504 48.2 | 240 23.0 | 162 15.5 | 139 13.3 |
| あまりあてはまらない(n=899) | 438 48.7 | 210 23.4 | 141 15.7 | 110 12.2 |
| まったくあてはまらない(n=194) | 102 52.6 | 35 18.0 | 20 10.3 | 37 19.1 |

カイ二乗検定:p>0.05(ns)

もっと自分自身を尊敬できるようになりたい

上段:件数、下段:%

| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
|-------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| とてもあてはまる(n=1,584) | 736 46.5 | 356 22.5 | 239 15.1 | 253 16.0 |
| ややあてはまる(n=2,063) | 975 47.3 | 472 22.9 | 316 15.3 | 300 14.5 |
| どちらともいえない(n=856) | 408 47.7 | 201 23.5 | 120 14.0 | 127 14.8 |
| あまりあてはまらない(n=466) | 234 50.2 | 113 24.2 | 60 12.9 | 59 12.7 |
| まったくあてはまらない(n=97) | 48 49.5 | 16 16.5 | 16 16.5 | 17 17.5 |

カイ二乗検定:p>0.05(ns)

<内々定企業数に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)>

内々定企業数をがまん強さ(ねばり強さ)に関する項目別でクロス集計した結果は、図表 2-4-9 のとおりとなっている。内々定企業数は、自尊感情に関する項目別のクロス集計同様、「4社」、「5社」、「6社以上」の回答を「4社以上」としてクロス集計を行った。

結果として、どのがまん強さ(ねばり強さ)に関する項目も有意な差が確認された。内々定企業数が「4社以上」の回答者は、「困難があっても、私はやる気を失わない」、「始めたことは、どんなことでも最後までやりとげる」、「私は精魂傾けてものごとに取り組む」で「非常にあてはまる」と回答している割合が2割を超え、「新しいアイデアや計画によって、それまで取り組んでいたことから注意がそれることがある」で「全くあてはまらない」と回答している割合が2割を超えている。一方、内々定企業数が「1社」の回答者は、「困難があっても、私はやる気を失わない」、「始めたことは、どんなことでも最後までやりとげる」で「全くあてはまらない」と回答している割合が6割近くを占めている。

図表 2-4-9 内々定企業数に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)

新しいアイデアや計画によって、それまで取り組んでいたことから注意がそれることがある

| | 上段:件数、下段:% | | | |
|---------------------|---------------|-------------|-------------|-------------|
| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
| 非常にあてはまる(n=350) | 178 50.9 | 81 23.1 | 37 10.6 | 54 15.4 |
| かなりあてはまる(n=991) | 452 45.6 | 230 23.2 | 157 15.8 | 152 15.3 |
| 少しあてはまる(n=2,096) | 1,034 49.3 | 474 22.6 | 300 14.3 | 288 13.7 |
| あまりあてはまらない(n=1,489) | 665 44.7 | 354 23.8 | 240 16.1 | 230 15.4 |
| 全くあてはまらない(n=146) | 74 50.7 | 23 15.8 | 18 12.3 | 31 21.2 |

カイ二乗検定:p<0.05

図表 2-4-9 内々定企業数に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)(続き)

困難があっても、私はやる気を失わない

上段:件数、下段:%

| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
|---------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 非常にあてはまる(n=415) | 154 37.1 | 103 24.8 | 66 15.9 | 92 22.2 |
| かなりあてはまる(n=1,327) | 591 44.5 | 289 21.8 | 208 15.7 | 239 18.0 |
| 少しあてはまる(n=1,874) | 926 49.4 | 438 23.4 | 254 13.6 | 256 13.7 |
| あまりあてはまらない(n=1,317) | 651 49.4 | 301 22.9 | 209 15.9 | 156 11.8 |
| 全くあてはまらない(n=133) | 77 57.9 | 28 21.1 | 15 11.3 | 13 9.8 |

カイ二乗検定:p<0.001

あるアイデアや計画に一時的に夢中になっても、あとで興味を失うことがある

上段:件数、下段:%

| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
|---------------------|---------------|-------------|-------------|-------------|
| 非常にあてはまる(n=488) | 247 50.6 | 104 21.3 | 70 14.3 | 67 13.7 |
| かなりあてはまる(n=1,286) | 605 47.0 | 287 22.3 | 199 15.5 | 195 15.2 |
| 少しあてはまる(n=2,123) | 1,038 48.9 | 493 23.2 | 307 14.5 | 285 13.4 |
| あまりあてはまらない(n=1,057) | 453 42.9 | 254 24.0 | 162 15.3 | 188 17.8 |
| 全くあてはまらない(n=107) | 55 51.4 | 18 16.8 | 14 13.1 | 20 18.7 |

カイ二乗検定:p<0.05

私は頑張り屋だ

上段:件数、下段:%

| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
|-------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 非常にあてはまる(n=749) | 328 43.8 | 162 21.6 | 120 16.0 | 139 18.6 |
| かなりあてはまる(n=1,461) | 650 44.5 | 346 23.7 | 225 15.4 | 240 16.4 |
| 少しあてはまる(n=1,832) | 895 48.9 | 424 23.1 | 262 14.3 | 251 13.7 |
| あまりあてはまらない(n=879) | 451 51.3 | 200 22.8 | 123 14.0 | 105 11.9 |
| 全くあてはまらない(n=139) | 77 55.4 | 27 19.4 | 19 13.7 | 16 11.5 |

カイ二乗検定:p<0.01

図表 2-4-9 内々定企業数に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)(続き)

目標を決めても、後から変えてしまうことがよくある

| | 上段:件数、下段:% | | | |
|---------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
| 非常にあてはまる(n=347) | 179 51.6 | 75 21.6 | 42 12.1 | 51 14.7 |
| かなりあてはまる(n=1,156) | 581 50.3 | 251 21.7 | 173 15.0 | 151 13.1 |
| 少しあてはまる(n=1,983) | 940 47.4 | 483 24.4 | 284 14.3 | 276 13.9 |
| あまりあてはまらない(n=1,428) | 629 44.0 | 318 22.3 | 232 16.2 | 249 17.4 |
| 全くあてはまらない(n=144) | 65 45.1 | 32 22.2 | 19 13.2 | 28 19.4 |

カイ二乗検定:p<0.01

数ヶ月以上かかるような計画に集中して取り組み続けることは難しい

| | 上段:件数、下段:% | | | |
|---------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
| 非常にあてはまる(n=414) | 218 52.7 | 84 20.3 | 54 13.0 | 58 14.0 |
| かなりあてはまる(n=1,006) | 507 50.4 | 232 23.1 | 153 15.2 | 114 11.3 |
| 少しあてはまる(n=1,581) | 757 47.9 | 381 24.1 | 229 14.5 | 214 13.5 |
| あまりあてはまらない(n=1,755) | 787 44.8 | 390 22.2 | 265 15.1 | 313 17.8 |
| 全くあてはまらない(n=307) | 128 41.7 | 72 23.5 | 49 16.0 | 58 18.9 |

カイ二乗検定:p<0.001

始めたことは、どんなことでも最後までやりとげる

| | 上段:件数、下段:% | | | |
|-------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
| 非常にあてはまる(n=637) | 262 41.1 | 152 23.9 | 94 14.8 | 129 20.3 |
| かなりあてはまる(n=1,540) | 688 44.7 | 349 22.7 | 246 16.0 | 257 16.7 |
| 少しあてはまる(n=1,930) | 965 50.0 | 434 22.5 | 278 14.4 | 253 13.1 |
| あまりあてはまらない(n=860) | 428 49.8 | 207 24.1 | 121 14.1 | 104 12.1 |
| 全くあてはまらない(n=101) | 58 57.4 | 19 18.8 | 13 12.9 | 11 10.9 |

カイ二乗検定:p<0.001

図表 2-4-9 内々定企業数に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)(続き)

私は精魂傾けてものごとに取り組む

| | 上段:件数、下段:% | | | |
|-------------------|---------------|-------------|-------------|-------------|
| | 1社 | 2社 | 3社 | 4社以上 |
| 非常にあてはまる(n=479) | 194 40.5 | 116 24.2 | 67 14.0 | 102 21.3 |
| かなりあてはまる(n=1,405) | 615 43.8 | 325 23.1 | 216 15.4 | 249 17.7 |
| 少しあてはまる(n=2,100) | 1,021 48.6 | 479 22.8 | 317 15.1 | 283 13.5 |
| あまりあてはまらない(n=967) | 507 52.4 | 221 22.9 | 133 13.8 | 106 11.0 |
| 全くあてはまらない(n=100) | 56 56.0 | 14 14.0 | 16 16.0 | 14 14.0 |

カイ二乗検定:p<0.001

(4)小括

本項では、内々定を得ている回答者と得ていない回答者、内々定の企業数が多い回答者と少ない回答者など、それぞれの特徴をどのような特徴があるのか、非認知能力に関する項目との関連をみるため、内々定の有無および内々定企業数と、自尊感情、がまん強さ(ねばり強さ)、精神的回復力(レジリエンス)との関連性についてクロス集計を行った。

その結果、内々定を得ている回答者や内々定企業数が多い回答者は、全体的に肯定的な自己評価や特性を有しており、反対に内々定を得ていない学生は、自己否定的な回答の割合が高い傾向がみられた。

これらの結果から、就職活動における成果には、学力やスキルのみならず、自尊感情やがまん強さ、精神的回復力といった非認知能力も大きく関与している可能性が示唆される。

今後は、調査回答者の就職後の結果を分析することが可能になるため、就職後の継続性と非認知能力の関連性などについても分析されることが期待される。

5. 調査回答者の変化に関する分析

調査回答者の通学・就業状況に着目し、高等学校等へ通学している第 16 回調査から第 22 回調査間の変化に関する分析を行った。

(1) 通学・就業状況の変化(第 16 回、第 18 回、第 19 回、第 22 回調査)

本項では、高校1年生相当の第 16 回調査、高校3年生相当の第 18 回調査、大学、専門学校・各種学校の1年生相当の第 19 回調査、大学4年生相当の第 22 回調査の通学・就業状況の変化を確認した。通学・就業状況は、「通学している」、「就業している」、「通学も就業もしていない」、「その他」の4つに分類をしたが、各調査回における回答選択肢の振り分けは下記の表のとおりである。

図表 2-5-1 通学・就業状況の変化の分類

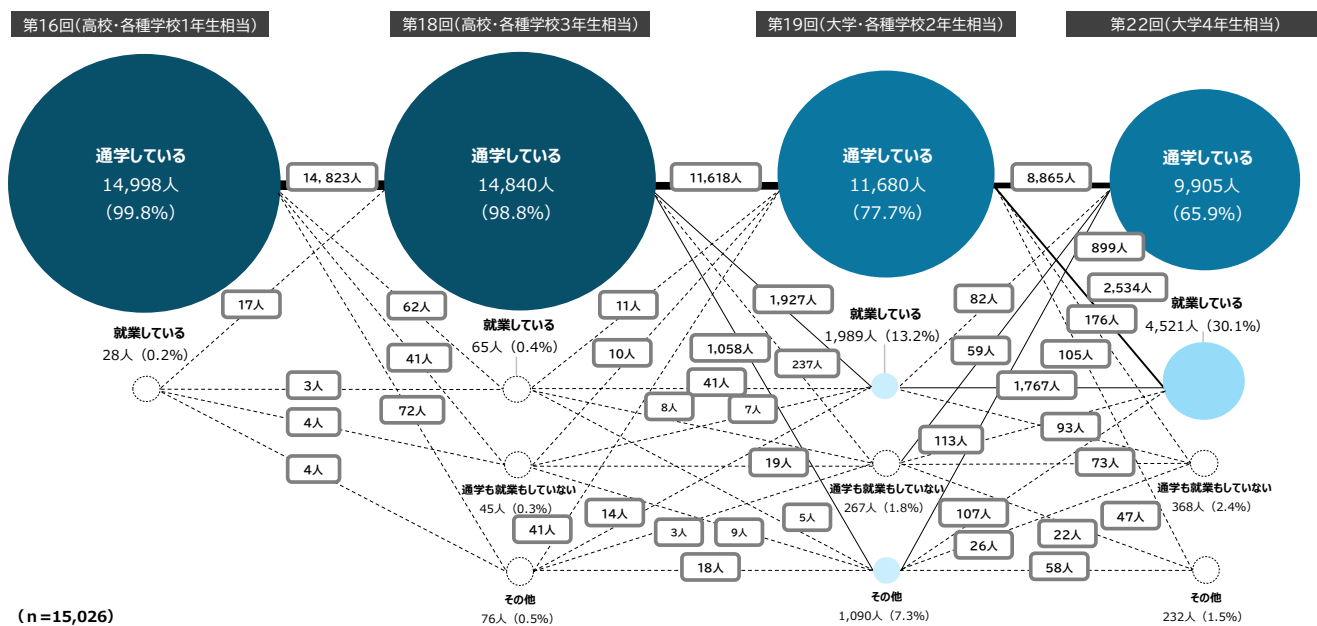
| 分類項目 | 第 16 回 問 15 の 回答選択肢 | 第 18 回、19 回 問9の 回答選択肢 | 第 22 回 問 10 の 回答選択肢 |
|-----------------|--|---|---|
| 通学している | 「主に通学している」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 | 「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 | 「在学していて、働いていない」 「在学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「在学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 |
| 就業している | 「就業(常勤の仕事)している」 「パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 | 「就業(常勤の仕事)している」 「パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 | 「就業(常勤の仕事)している」 「パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 |
| 通学も就業も していない | 「就業していない」 「公共職業能力開発施設等で 訓練している」 | 「就業していない」 「公共職業能力開発施設等で 訓練している」 | 「就業していない」 「公共職業能力開発施設等で 訓練している」 |
| その他 | 「その他」 | 「その他」 | 「その他」 |

なお、ここでの集計は第 16 回、第 18 回、第 19 回、第 22 回調査の「通学・就業状況」の問いのいずれにも回答があった回答者に限った集計結果である。

①全体

通学している人は第16回時点で99.8%、第18回時点で98.8%と10割近くとなっている。第19回時点では77.7%、第22回時点では65.9%となっている。就業している人は第16回時点では0.2% (28人)だが、徐々に増加し、第22回時点で30.1%となっている。通学も就業もしていない人は第16回時点では0.0%(0人)だが、徐々に増加し、第22回時点で2.4%(368人)となっている。

図表 2-5-2 通学・就業状況の変化(第16回、第18回、第19回、第22回調査)



②通学も就業もしていない状況が継続している人の実態

前述のとおり、第 16 回調査時点で通学も就業もしていない人は 0.0%(0 人)となっているが、第 18 回調査以降は、一定数、通学も就業もしていない人がいる。そこで、サンプル数が少ないため、参考での掲載とはなるが、第 18 回調査、または、第 19 回調査時点で「通学も就業もしていない」状況になり、その後の第 22 回調査においても「通学も就業もしていない」状況が継続している回答者の中学3年生時点の状況や第 16 回調査時点(高校1年生相当)の状況を確認した。なお、この状況を確認するため、「その他の人」(「通学も就業もしていない」状況が継続していない人)と比較を行っている。

通学も就業もしていない状況が継続している人が第 16 回調査時点で通っている学校は「高等学校」が 60.3%で最も多いが、その他の人と比較すると少ない傾向にある。通学も就業もしていない状況が継続している人は、次いで「特別支援学校」が 32.9%と多くなっており、その他の人と比較すると多い傾向にある。

通学も就業もしていない状況が継続している人の第 16 回調査時点での進路選択の満足度は「満足」が 32.9%、「どちらかといえば満足」が 41.1%と多くなっているが、その他の人と比較すると少ない傾向にある。通学も就業もしていない状況が継続している人は「どちらかといえば不満」が 13.7%となっており、その他の人と比較すると多い傾向にある。

通学も就業もしていない状況が継続している人の中学3年生の時の成績は、「下の方」が 45.2%と最も多く、その他の人と比較すると多い傾向にある。

図表 2-5-3 第 16 回調査時点で通っている学校

| | 上段:件数、下段:% | | | | | |
|-----------------------------|----------------|------------|------------|-----------|---------|------------|
| | 高等学校 | 高等専門学校 | 特別支援学校 | 専修学校・各種学校 | その他 | 無回答 |
| 通学も就業もしていない状況が継続している人(n=73) | 44 60.3 | 1 1.4 | 24 32.9 | 1 1.4 | - - | 3 4.1 |
| その他の人(n=14,953) | 14,251 95.3 | 306 2.0 | 188 1.3 | 60 0.4 | 41 0 | 107 0.7 |

カイ二乗検定:p<0.001

図表 2-5-4 第 16 回調査時点の進路選択の満足度

| | 上段:件数、下段:% | | | | |
|---------------------------------|---------------|------------------------|---|------------|-------------|
| | 満足 | 満足 どちら かとい えば | 不 満 ち ら か と い え ば | 不 満 | 無 回 答 |
| 通学も就業もしていない状況が 継続している人(n=73) | 24 32.9 | 30 41.1 | 10 13.7 | 3 4.1 | 6 8.2 |
| その他の人(n=14,953) | 6,219 41.6 | 6,774 45.3 | 1,423 9.5 | 345 2.3 | 192 1.3 |

カイ二乗検定:p<0.001

図表 2-5-5 中学3年生の時の成績

| | 上段:件数、下段:% | | | | | |
|---------------------------------|---------------|-----------------------|----------------------------|-----------------------|--------------|-------------|
| | 上 の 方 | や や 上 の 方 | 真 ん 中 あ た り | や や 下 の 方 | 下 の 方 | 無 回 答 |
| 通学も就業もしていない状況が 継続している人(n=73) | 1 1.4 | 9 12.3 | 14 19.2 | 11 15.1 | 33 45.2 | 5 6.8 |
| その他の人(n=14,953) | 2,911 19.5 | 4,075 27.3 | 4,089 27.3 | 2,385 15.9 | 1,362 9.1 | 131 0.9 |

カイ二乗検定:p<0.001

(2)第 15 回調査時点の進路意向別にみた通学・就業状況の変化

本項目では、高校3年生相当の第 18 回調査、大学、専門学校・各種学校の2年生相当の第 20 回調査、大学4年生相当の第 22 回調査の通学就業状況の変化を第 15 回調査時点の進路意向別で確認した。通学・就業状況は、「通学している<高等学校/大学>」、「通学している<専修学校・各種学校>」、「通学している<特別支援学校・その他/その他>」、「就業している」、「通学も就業もしていない」、「その他」の6つに分類をしたが、各調査回における回答選択肢の振り分けは図表 2-5-6 のとおりである。

図表 2-5-6 通学・就業状況の変化の分類

| 分類項目 | 第 18 回 問 15、16②の 回答選択肢 | 第 20 回 問 8、9②の 回答選択肢 | 第 22 回 問 10、11②の 回答選択肢 |
|-------------------------------------|---|---|---|
| 通学している <高等学校> <大学> | 【問 15】 「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 16②】 「高等学校(中等教育学校後 期課程を含みます)」 | 【問 8】 「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 9②】 「大学」 「短期大学」 | 【問 10】 「在学していて、働いていない」 「在学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「在学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 11②】 「大学」 「短期大学」 |
| 通学している <専修学校・各 種学校> | 【問 15】 「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 16②】 「高等専門学校」 「専修学校・各種学校」 | 【問 8】 「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 9②】 「高等専門学校(5 年制)」 「専修学校・各種学校」 | 【問 10】 「在学していて、働いていない」 「在学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「在学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 11②】 「高等専門学校(5 年制)」 「専修学校・各種学校」 |
| 通学している <特別支援学 校・その他> <その他> | 【問 15】 「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 16②】 「特別支援学校」 「その他」 | 【問 8】 「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 9②】 「その他」 | 【問 10】 「在学していて、働いていない」 「在学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「在学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 11②】 「その他」 |
| 就業している | 【問 15】 「就業(常勤の仕事)している」 「パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 | 【問 8】 「就業(常勤の仕事)している」 「パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 | 【問 10】 「就業(常勤の仕事)している」 「パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 |
| 通学も就業も していない | 【問 15】 「就業していない」 「公共職業能力開発施設等で 訓練している」 | 【問 8】 「就業していない」 「公共職業能力開発施設等で 訓練している」 | 【問 10】 「就業していない」 「公共職業能力開発施設等で 訓練している」 |
| その他 | 【問 15】 「その他」 | 【問 8】 「その他」 | 【問 10】 「その他」 |

なお、ここでの集計は第 18 回、第 20 回、第 22 回調査の「通学・就業状況」の問い、第 15 回調査の進路意向の問いのいずれにも回答があった回答者に限った集計結果である。

①全体

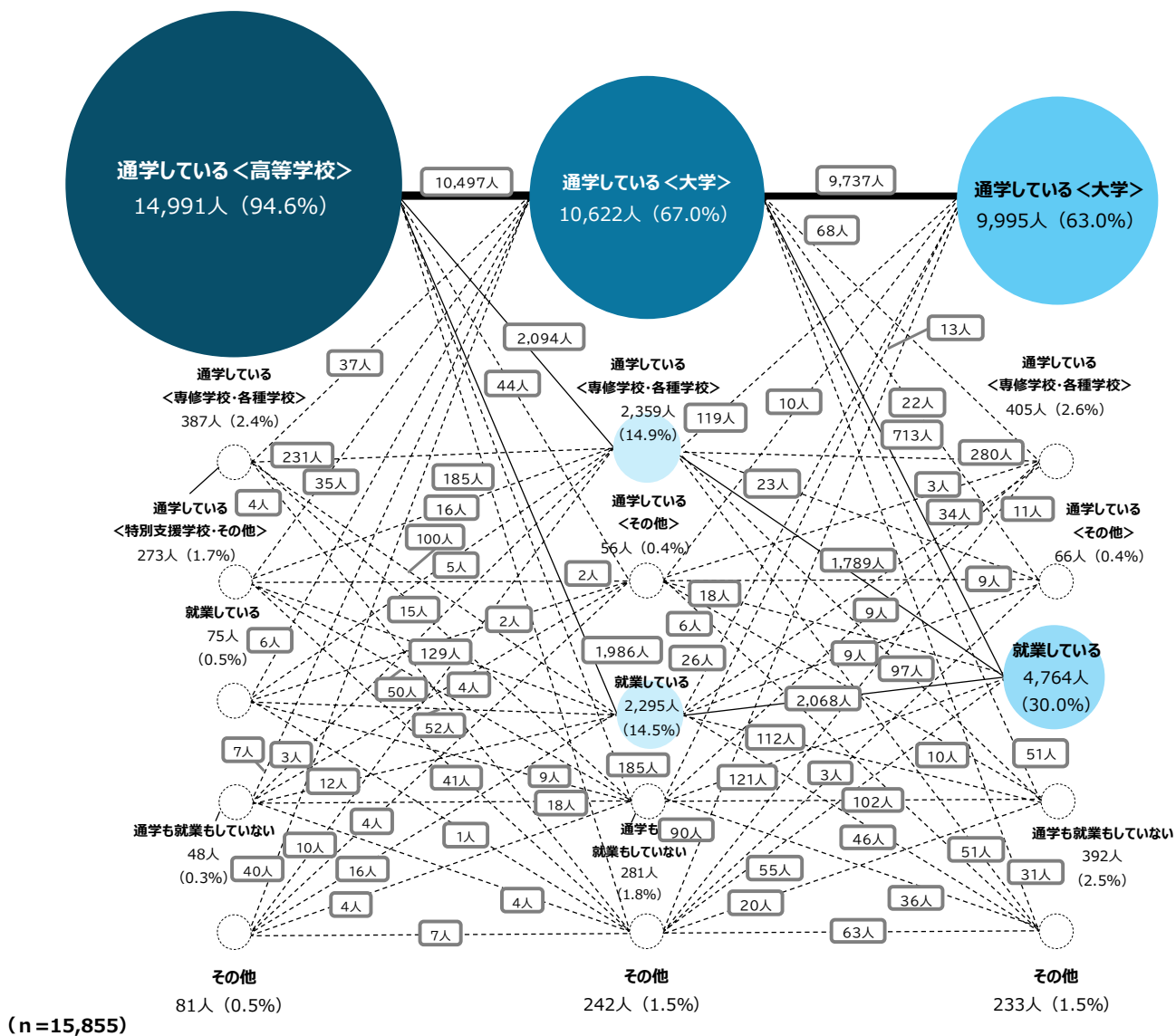
全体の変化をみると、第 18 回時点で高等学校に通学している人は 94.6%となっている。その後、大学に通学している人は第 20 回時点では 67.0%、第 22 回時点では 63.0%となっている。専修学校・各種学校に通学している人は第 18 回時点では 2.4%となっているが、第 20 回時点では 14.9%となっている。第 22 回時点では 2.6%となっている。就業している人は第 18 回時点では 0.5%となっているが、徐々に増加し、第 20 回時点では 14.5%、第 22 回時点では 30.0%となっている。通学も就業もしていない人は第 18 回時点では 0.3%(48 人)となっているが、徐々に増加し、第 20 回時点では 1.8%(281 人)、第 22 回時点では 2.5%(392 人)となっている。

図表 2-5-7 通学・就業状況の変化(全体)

第18回(高校・各種学校3年生相当)

第20回(大学・各種学校2年生相当)

第22回(大学4年生相当)

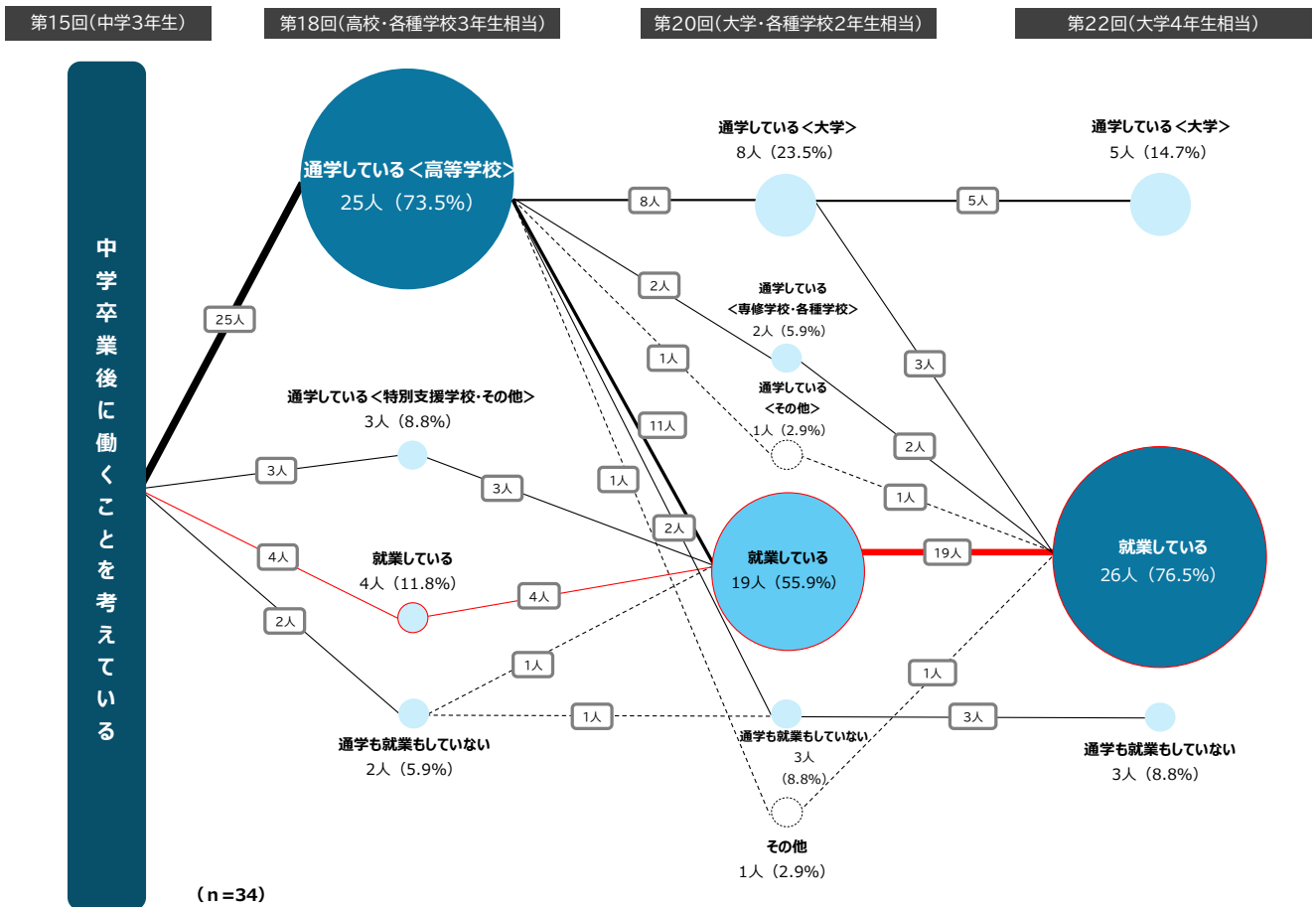


②第 15 回調査時点で中学卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

サンプル数が少ないため、参考値となるが、第 15 回調査時点で中学卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化をみると、第 18 回時点では高等学校に通学している人が 73.5%となっている。第 20 回時点になると就業している人が 55.9%(19 人)となり、第 22 回時点になると 76.5%(26 人)となっている。通学も就業もしていない人は第 18 回時点では 5.9%(2 人)となっており、第 20 回、第 22 回時点では 8.8%(3 人)となっている。

なお、第 15 回の進路意向どおりの進路選択をした回答者は 11.8%(4人)となっている。

図表 2-5-8 第 15 回調査時点で全体中学卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

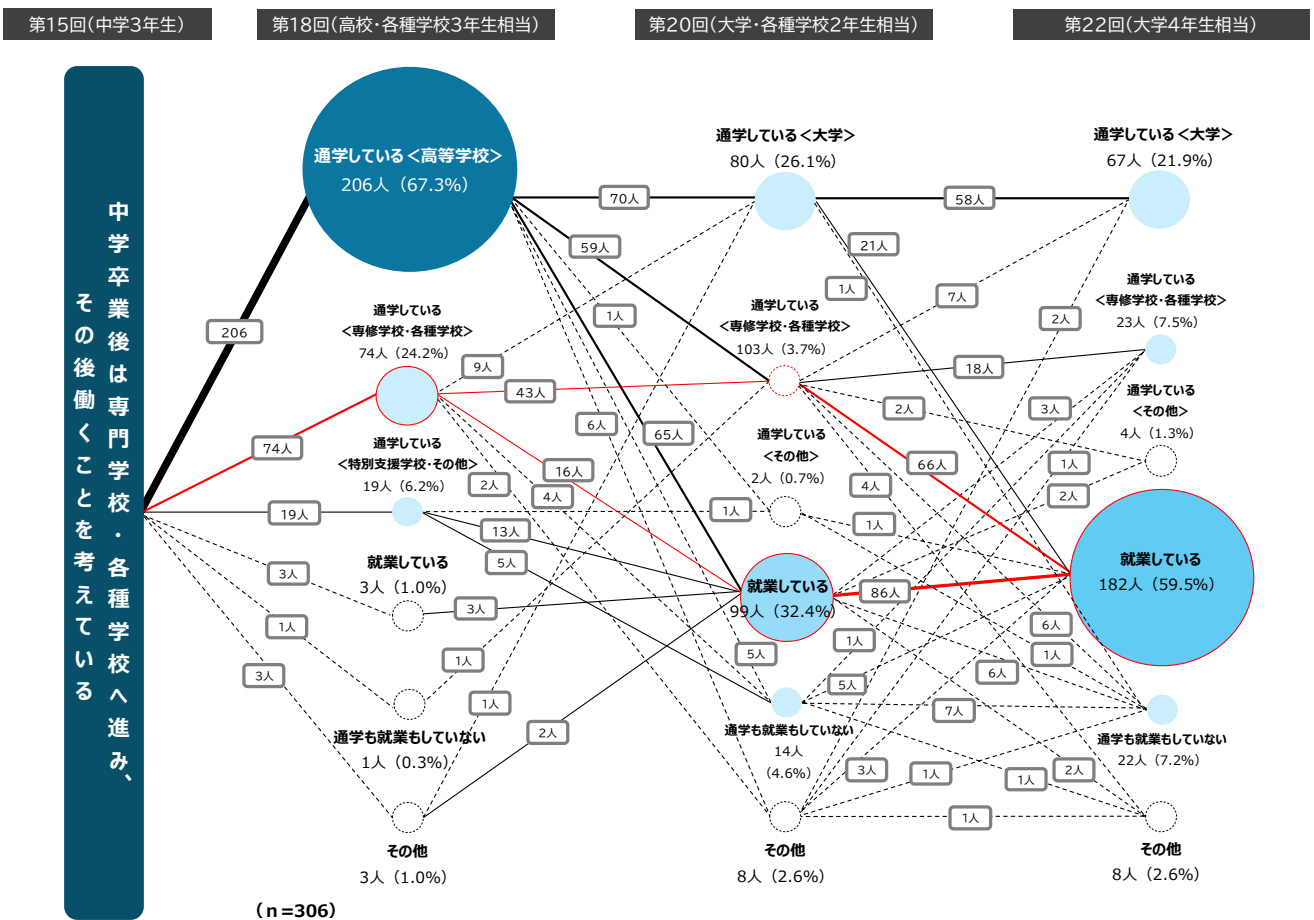


③第 15 回調査時点で中学卒業後は専門学校・各種学校へ進み、その後働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

第 15 回調査時点で中学卒業後は専門学校・各種学校へ進み、その後働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化をみると、第 18 回時点で高等学校に通学している人は 67.3%となっており、専修学校・各種学校に通学している人は 24.2%となっている。第 20 回時点で大学に通学している人は 26.1%となっており、就業している人が 32.4%となっている。第 22 回時点では就業している人が 59.5%となっており、大学に通学している人は 21.9%となっている。通学も就業もしていない人は第 18 回時点では 0.3% (1人)となっているが、第 20 回時点では 4.6%(14人)、第 22 回時点では 7.2%(22人)となっている。

なお、第 15 回の進路意向どおりの進路選択をした回答者は 10.5%(32人)となっている。

図表 2-5-9 第 15 回調査時点で中学卒業後は専門学校・各種学校へ進み、その後働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

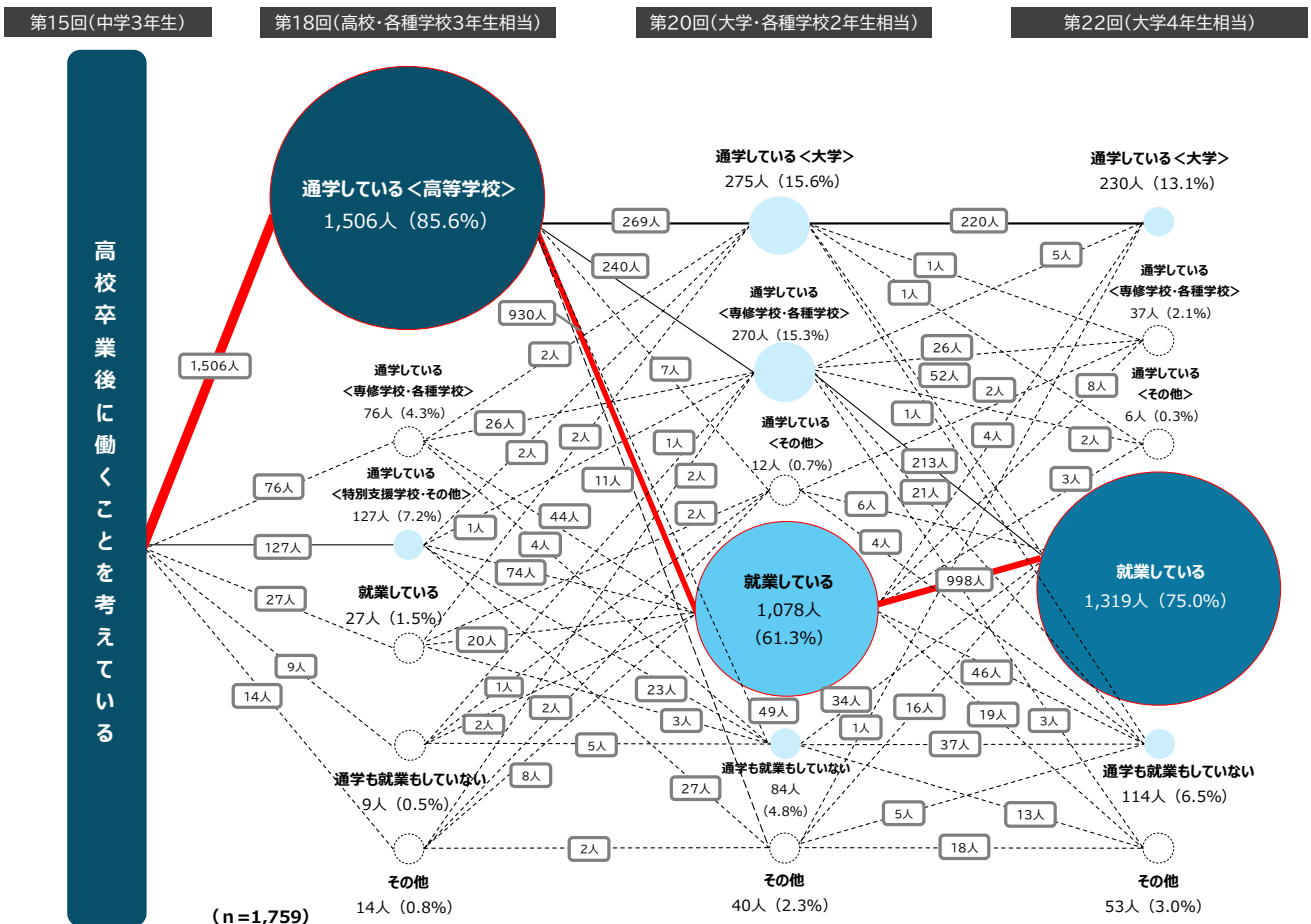


④第 15 回調査時点で高校卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

第 15 回調査時点で高校卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化をみると、第 18 回時点で高等学校に通学している人は 85.6%となっている。第 20 回時点では就業している人が 61.3%となっており、大学に通学している人は 15.6%、専修学校・各種学校に通学している人は 15.3%となっている。第 22 回時点では就業している人が 75.0%となっており、大学に通学している人は 13.1%となっている。通学も就業もしていない人は第 18 回時点では 0.5%(9人)となっているが、第 20 回時点では 4.8%(84人)、第 22 回時点では 6.5%(114人)となっている。

なお、第 15 回の進路意向どおりの進路選択をした回答者は 49.3%(867人)となっている。

図表 2-5-10 第 15 回調査時点で高校卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

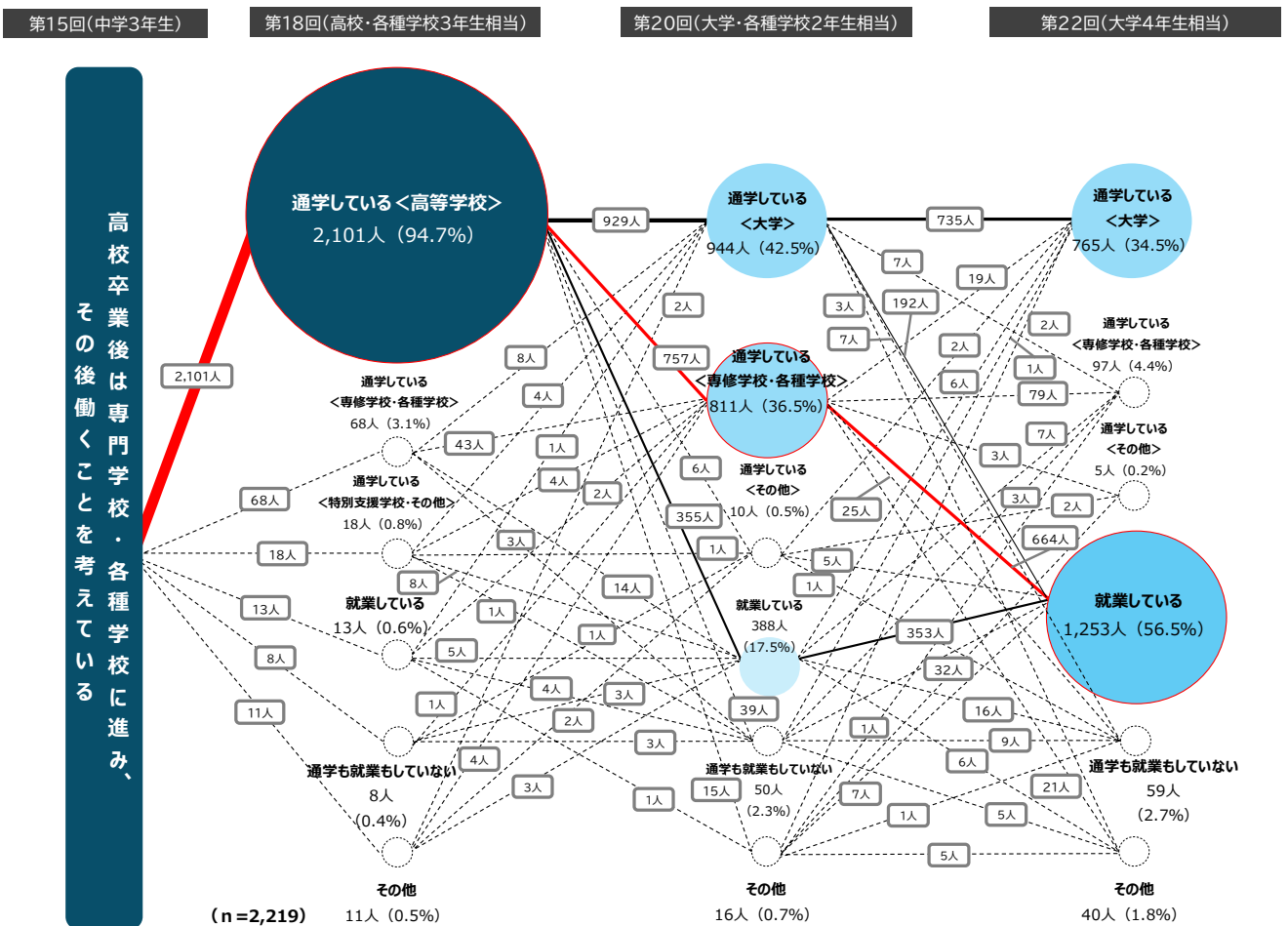


⑤第 15 回調査時点で高校卒業後は専門学校・各種学校に進み、その後働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

第 15 回調査時点で高校卒業後は専門学校・各種学校に進み、その後働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化をみると、第 18 回時点で高等学校に通学している人は 94.7%となっている。第 20 回時点では大学に通学している人が 42.5%となっており、専修学校・各種学校に通学している人が 36.5%となっている。第 22 回時点では就業している人が 56.5%となっており、大学に通学している人は 34.5%となっている。通学も就業もしていない人は第 18 回時点では 0.4%(8人)となっているが、第 20 回時点では 2.3%(50人)、第 22 回時点では 2.7%(59人)となっている。

なお、第 15 回の進路意向どおりの進路選択をした回答者は 28.2%(626人)となっている。

図表 2-5-11 高校卒業後は専門学校・各種学校に進み、その後働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

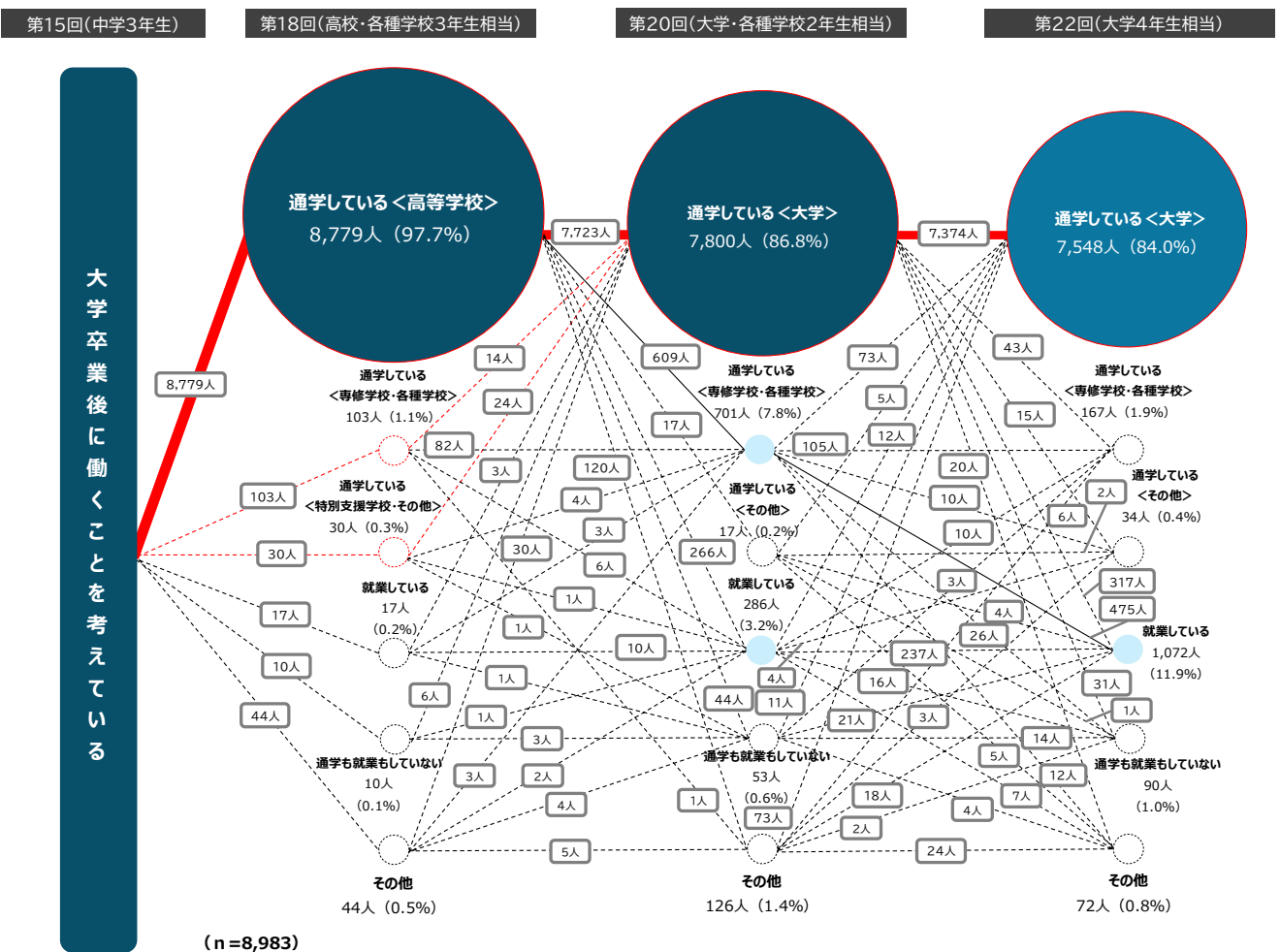


⑥第15回調査時点で大学卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

第15回調査時点で大学卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化をみると、第18回時点で高等学校に通学している人は97.7%となっている。第20回時点では大学に通学している人が86.8%となっており、第22回時点で大学に通学している人は84.0%となっている。通学も就業もしていない人は第18回時点では0.1%(10人)となっているが、第20回時点では0.6%(53人)、第22回時点では1.0%(90人)となっている。

なお、第15回の進路意向どおりの進路選択をした回答者は81.7%(7,337人)となっている。

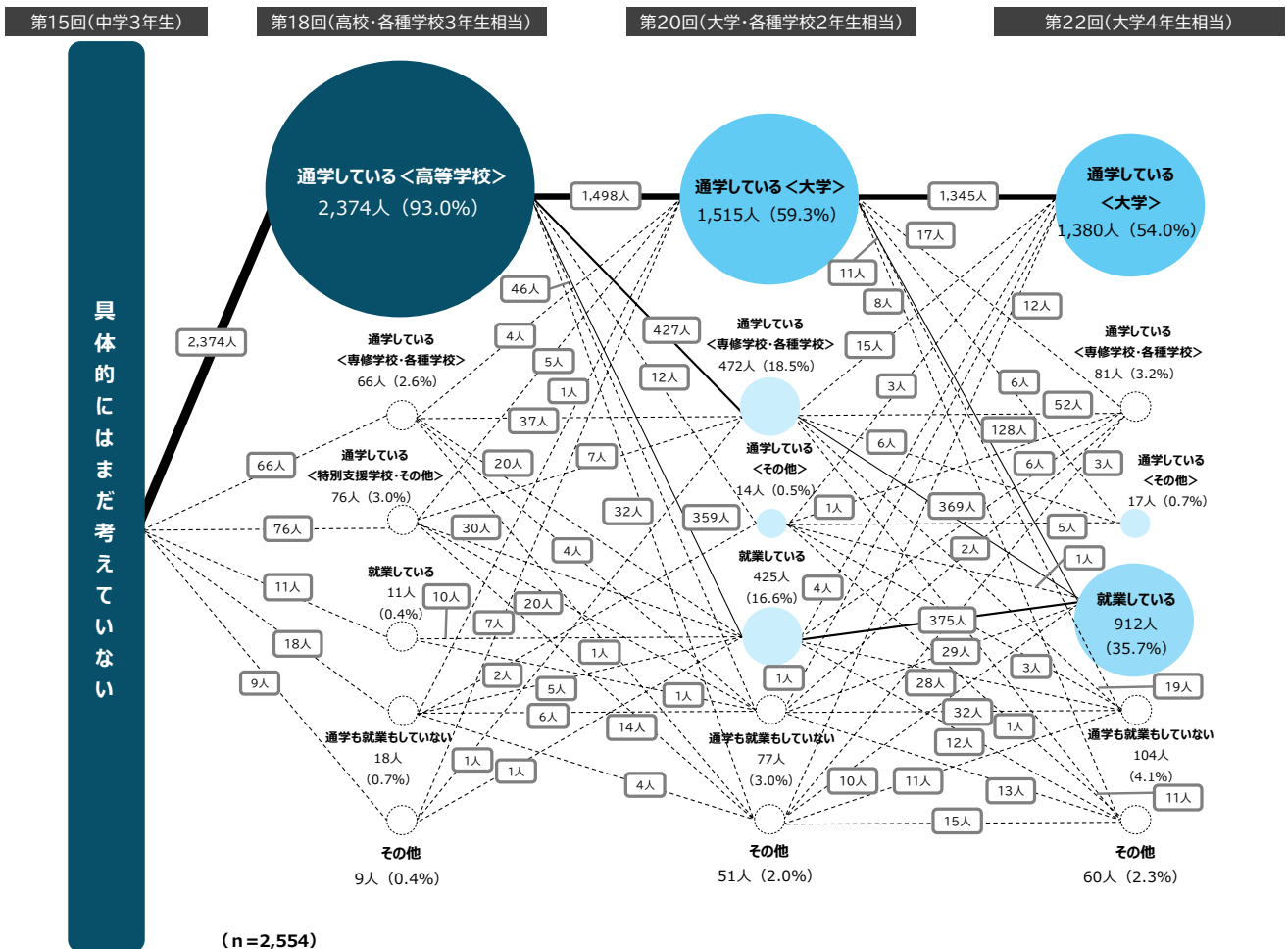
図表 2-5-12 第15回調査時点で大学卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化



⑦第15回調査時点で具体的には進路を考えていなかった人の通学・就業状況の変化

第15回調査時点で具体的には進路を考えていなかった人の通学・就業状況の変化をみると、第18回時点で高等学校に通学している人は93.0%となっている。第20回時点では大学に通学している人が59.3%となっており、専修学校・各種学校に通学している人が18.5%、就業している人が16.6%となっている。第22回時点では大学に通学している人が54.0%となっており、就業している人が35.7%となっている。通学も就業もしていない人は第18回時点では0.7%(18人)となっているが、第20回時点では3.0%(77人)、第22回時点では4.1%(104人)となっている。

図表 2-5-13 第15回調査時点で具体的には進路を考えていなかった人の通学・就業状況の変化



⑧第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路を選択した人の実態

第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路を選択した人は、前述のとおり、中学卒業後に働くことを考えていた人で 11.8%(4人)、中学卒業後は専門学校・各種学校へ進み、その後働くことを考えていた人で 10.5%(32人)、高校卒業後に働くことを考えていた人で 49.3%(867人)、高校卒業後は専門学校・各種学校に進み、その後働くことを考えていた人で 28.2%(626人)、大学卒業後に働くことを考えていた人で 81.7%(7,337人)となっていた。第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路を選択することが必ずしもよいということではないが、それぞれ進路意向どおりの進路を選択した人の実態を確認した。なお、この実態を確認するため、「進路意向どおりの進路を選択していない人」と比較を行っている。

ア. 第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路を選択した人の中学校 3 年生の時の成績(第 16 回調査)

第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路を選択した人の中学校 3 年生の時の成績の自己評価は、大学卒業後に働くことを考えていた人で「やや上のほう」が 34.6%、「上の方」が 32.4%となっており、進路意向どおりの進路を選択していない人と比較すると多い傾向にある。高校卒業後は専門学校・各種学校に進み、その後働くことを考えていた人は「真ん中あたり」が 39.3%、「やや下の方」が 26.4%となっており、進路意向どおりの進路を選択していない人と比較するとやや多い傾向にある。高校卒業後に働くことを考えていた人は「やや下のほう」が 33.7%、「真ん中あたり」が 31.5%となっており、進路意向どおりの進路を選択していない人と比較するとやや多い傾向にある。中学卒業後は専門学校・各種学校へ進み、その後働くことを考えていた人は「下の方」が 43.8%となっており、進路意向どおりの進路を選択していない人と比較するとやや多い傾向にある。

図表 2-5-14 第 15 回調査時点の進路意向ごとの進路を選択した人の中学校 3 年生の時の成績
(第 16 回調査)

中学卒業後に働くことを考えている

| | 上段:件数、下段:% | | | | | |
|--------------------------|------------|-------|--------|-------|-------|-----|
| | 上の方 | やや上の方 | 真ん中あたり | やや下の方 | 下の方 | 無回答 |
| 進路意向ごとの進路を選択した人(n=4) | - | - | - | - | 4 | - |
| | - | - | - | - | 100.0 | - |
| 進路意向ごとの進路を選択していない人(n=30) | - | 2 | 11 | 10 | 7 | - |
| | - | 6.7 | 36.7 | 33.3 | 23.3 | - |

カイ二乗検定:p>0.05(ns)

中学卒業後は専門学校・各種学校へ進み、その後働くことを考えている

| | 上段:件数、下段:% | | | | | |
|---------------------------|------------|-------|--------|-------|------|-----|
| | 上の方 | やや上の方 | 真ん中あたり | やや下の方 | 下の方 | 無回答 |
| 進路意向ごとの進路を選択した人(n=32) | 5 | 9 | 1 | 2 | 14 | 1 |
| | 15.6 | 28.1 | 3.1 | 6.3 | 43.8 | 3.1 |
| 進路意向ごとの進路を選択していない人(n=274) | 31 | 37 | 79 | 69 | 53 | 5 |
| | 11.3 | 13.5 | 28.8 | 25.2 | 19.3 | 1.8 |

カイ二乗検定:p<0.001

高校卒業後に働くことを考えている

| | 上段:件数、下段:% | | | | | |
|---------------------------|------------|-------|--------|-------|------|-----|
| | 上の方 | やや上の方 | 真ん中あたり | やや下の方 | 下の方 | 無回答 |
| 進路意向ごとの進路を選択した人(n=867) | 14 | 93 | 273 | 292 | 189 | 6 |
| | 1.6 | 10.7 | 31.5 | 33.7 | 21.8 | 0.7 |
| 進路意向ごとの進路を選択していない人(n=892) | 39 | 127 | 236 | 231 | 231 | 28 |
| | 4.4 | 14.2 | 26.5 | 25.9 | 25.9 | 3.1 |

カイ二乗検定:p<0.001

図表 2-5-14 第 15 回調査時点の進路意向ごとの進路を選択した人の中学校 3 年生の時の成績
(第 16 回調査)(続き)

高校卒業後は専門学校・各種学校に進み、その後働くことを考えている

| | 上段:件数、下段:% | | | | | |
|---------------------------------|-------------|-----------------------|----------------------------|-----------------------|-------------|-------------|
| | 上 の 方 | や や 上 の 方 | 真 ん 中 あ た り | や や 下 の 方 | 下 の 方 | 無 回 答 |
| 進路意向ごとの進路を選択した人 (n=626) | 21 3.4 | 122 19.5 | 246 39.3 | 165 26.4 | 69 11.0 | 3 0.5 |
| 進路意向ごとの進路を選択していない人 (n=1,593) | 131 8.2 | 369 23.2 | 541 34.0 | 371 23.3 | 168 10.5 | 13 0.8 |

カイ二乗検定:p<0.001

大学卒業後に働くことを考えている

| | 上段:件数、下段:% | | | | | |
|---------------------------------|--------------|-----------------------|----------------------------|-----------------------|-------------|-------------|
| | 上 の 方 | や や 上 の 方 | 真 ん 中 あ た り | や や 下 の 方 | 下 の 方 | 無 回 答 |
| 進路意向ごとの進路を選択した人 (n=7,337) | 2377 32.4 | 2539 34.6 | 1622 22.1 | 564 7.7 | 197 2.7 | 38 0.5 |
| 進路意向ごとの進路を選択していない人 (n=1,646) | 240 14.6 | 432 26.2 | 532 32.3 | 309 18.8 | 116 7.0 | 17 1.0 |

カイ二乗検定:p<0.001

6. 小括

平成 13 年出生児縦断調査(第 22 回)の結果を用いて、第 22 回調査時点で在学中の回答者の就職活動の結果に関する分析を行ったが、内々定の状況は、おおむね自尊感情や精神的回復力が高い人、やり抜く力がある人など、非認知能力が高い人において、内々定を得ることができている傾向にあった。

また、調査回答者の変化に関する分析では、第 16 回、第 18 回、第 19 回、第 22 回調査時点の通学・就業状況の変化を確認するとともに、通学も就業もしていない状況が継続している人の実態を分析した。

また、第 15 回調査時点の進路意向別で第 18 回、第 20 回、第 22 回調査の通学・就業状況の変化も分

析した。今後は、一度通学も就業もしていない状況になったものの、その後、通学・就業した人の分析や、進路意向どおりの進路を選択した人の分析を行うなど、調査回答者の変化に関する分析をより深めていくことが、今後の教育政策の立案に資する上で重要と考える。

Ⅲ 平成 22 年出生児縦断調査の実施を見据えた調査項目等の検討

1. 検討・実施事項の概要

浜銀総合研究所(2022)¹¹では、平成13年児縦断調査について「この調査は、厚労省実施の調査を対象者が高校生になってから文部科学省が引き継いだという経緯から、主に個人(家庭)の選択の結果を追跡する形になっており、学校等の場で「どのような学校でどのような教育を受けたか(学校でどのような経験をしたか)」に関してはほとんど情報が得られていない。そのため、政策(特に、政府の介入が直接的に表れやすい小中学校)の効果を解明するという機能を果たすことが難しいという限界がある。」と問題を提起した上で、「ただし、「どのような学校でどのような教育を受けたか(学校でどのような経験をしたか)」について回顧的に回答する調査項目を盛り込むことで、より教育政策立案に活用できる可能性がある。」としている。さらに、「平成22年児縦断調査は、平成13年児縦断調査とほぼ同じ内容の調査を、別のコーホートを追跡する形で実施されている調査である。平成13年児縦断調査と比較をし、同一の調査項目により、約10年間の変化が把握可能であるという点で、データとしての価値が高い。平成22年児縦断調査は令和3年度現在、厚生労働省により実施されているが、今後の調査回において教育政策に関連するような調査項目を盛り込むことや、平成13年児縦断調査と同様に「どのような学校でどのような教育を受けたか(学校でどのような経験をしたか)」について回顧的に回答する調査項目を盛り込むことで、より教育政策立案等に活用できる可能性があると考えられた。」との提案を行っている。

これを受けて、浜銀総合研究所(2023)¹²では、ウェルビーイングに関する施策の検討・立案に資する分析が可能と考えられる調査項目や、学校卒業後も含めた子供の成長過程の解明に資する分析が可能と考えられる新規項目についての検討の一環として、「回顧的に状況把握を行うことを想定した項目検討」を行うとともに、「回顧的に状況把握を行うことを想定した項目検討」で検討した調査項目等が実際に分析に資するか、有意義となるかについて「予備調査」を行うことを想定し、調査項目の有意義性を測定するにあたり必要となる予備調査対象者の標本数やその抽出方法、調査項目数を含め、どのような調査分析が可能かの提案を行っている。

¹¹ 浜銀総合研究所(2022)「令和3年度「EBPMをはじめとした統計改革を推進するための調査研究」21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)における調査データを活用した詳細分析等に資する調査研究」(令和4年3月)

¹² 浜銀総合研究所(2023)「令和4年度「EBPMをはじめとした統計改革を推進するための調査研究」子どもの成長過程を解明するための長期的な縦断調査に関する調査分析」(令和5年3月)

浜銀総合研究所(2024)¹³ においては、回顧的な調査項目に関する予備調査「若者の生活や意識に関する調査」を実施し、「特に主語が自身以外のことを尋ねられている項目や、場面の想起が容易でない内容を尋ねられた場合に回答が難しくなっていると考えられることから、回顧法での設問設定にあたってはこれらのような点に留意を要する」、学校をやめた経験について「あらためてすべての調査対象者に対して回顧的に尋ねる項目を設定することで、学校をやめた経験(中退した経験)をより実態に近い形で把握できる可能性がある」、逆境体験について「家庭内で親・自分自身に起きた逆境的な経験の有無や内容について把握する項目を設定することは、分析を行う上で有用になるのではないかと考えられる」、「いじめの経験や不登校経験については21世紀出生児縦断調査ではこれまでに状況把握ができる項目設定がされていない。回顧的な形でこれらの経験の有無について把握する項目を設定することは、分析を行う上で有用になるのではないかと考えられる」等の考察を行っている。

本調査研究では、以上のような回顧的な調査項目に関する検討や予備調査の結果を踏まえ、先行研究や他の公的調査の実施状況を概観し、第16回調査以降の調査項目に回顧的な項目をどのように扱うべきか、特に、回顧期間として適切な範囲はどのようなものか、またそれを受けて今後回顧項目をどのように配分していくのがよいかという問題意識をベースに、回顧的項目の利点や課題、実施上考慮すべき事項を有識者からの意見を含め検討した。

2. 調査方法

本項では、第16回調査以降の調査項目に回顧的な項目をどのように扱うべきかを検討するため、文献調査を行った。文献検索には、CiNii Research、Google Scholar、J-STAGE を用いて、回顧的な調査に関する論文について網羅的に検索を行った。

検索式には、「回顧」、「調査」、回顧的な調査が有用とされている「逆境体験」等を組み合わせて使用した。検索は2024年9月から12月にかけて行い、検索する論文は日本語で執筆されたものを対象とした。論文の検索は2名で行い、本項に組み込むべき論文の精査は3名で行った。その結果、回顧的な調査項目の検討に資すると判断した文献は、「V 参考資料」のとおりである。

また、本調査研究は、I 2. 「(3)有識者に対するヒアリング」に記載のとおり、有識者の助言を受けなが

¹³ 浜銀総合研究所(2024)「令和5年度「公的統計調査等を活用した教育施策の改善を提案するための取組」子どもの成長過程を解明するための長期的な縦断調査に関する調査分析」(令和6年3月)

ら作成している。本項の回顧的な調査項目の検討についても、文献調査結果を有識者に照会し、助言を受けているため、本項には、「有識者の意見」としてその助言を掲載している。

3. 調査結果

(1) 回顧期間に関する分析

アドホックで実施される多くの調査において回顧的な項目は散見されるが、今回参考にした文献からはその期間の適切性そのものについて研究した文献、回顧期間の設定根拠に関する言及は確認できなかった。この点について有識者からは、「そもそも『期間』についての根拠を求めることに無理がある」、「そこに正解はない」、「期間の問題については、正確性の検証は不可能なので研究もないだろう」という意見が多数を占めていた。

回顧期間について、今回取り上げた文献(9件)、類似調査例(8例)からみると、回顧的な調査を行っている事例としては、過去の特定の時点を指定した回顧的な調査項目は89項目、過去の経験全体を指定した回顧的な調査項目は91項目であった。過去の特定の時点を指定した回顧的な調査項目の詳細をみると、調査対象者が20歳以上になってから子供のころのことを尋ねている問いが多く、11～20年前のことを尋ねている調査項目が56項目あった。

図表 3-1-1 回顧的な調査項目の分類結果(事例:8調査)

| |
|-------------------------|
| ・過去の特定の時点を指定した調査項目:89項目 |
| ～5年前:11項目 |
| 6～10年前:32項目 |
| 11～20年前:56項目 |
| 21年以上前:9項目 |
| ※重複分類あり |
| ・過去の経験全体を指定した調査項目:91項目 |

資料:参考資料を基に株式会社サーベイリサーチセンターが作成

回顧期間の設定については解を得られなかったが、別の「期間」の考えとして、有識者からは以下の提言があった。

図表 3-1-2 有識者の意見

| |
|---|
| <p>・同じ事象に対して、1 年経過、5 年経過、10 年経過などの時点で聞いたときに違いはあるのか、変化は生じるかという観点、いじめ体験がネガティブな捉え方から回復していく過程や逆境そのものとそれを乗り越える過程、変化という意味での「期間」(時間)そのものを捉えることには意味がある。そのためには経年的に聞く必要がある。期間を決めてというものではない。</p> |
| <p>・逆境体験については、同一項目の 5 年後の回答、さらにその数年後の回答を比較することで信頼性を見る方法もある(数年で大きく変わるようならば信頼性は低い)。</p> |

(2)回顧的設問内容について

今回の文献調査では参考資料を取り扱った。その回顧的な調査に関する言及は以下の通りである。

幼少期の経験がその後の発達や進路選択に与える長期的影響については、様々な形で論じられており、このテーマに関する関心の高さがうかがえる。

例えば、思春期女子の友人関係が自我発達に及ぼす影響、青年期における劣等感の発達の变化、思春期におけるいじめが及ぼす長期的な影響、学齢期のスポーツ参加と成人期のスポーツ参与の関連、児童生徒の道徳性形成要因など、幼少期からの様々な経験が長期的な発達に影響を与える可能性についての研究は様々な形で行われており、これらの研究テーマも今後の 21 世紀縦断調査の切り口として検討し得るものといえる。

図表 3-1-3 回顧的な調査の扱い及びその考察についてのまとめ

| 文献名等 | 年 | 回顧的な調査に関する言及 |
|--|------|---|
| <p>若者の生活や意識に関する調査分析</p> <p>1 ※子どもの成長過程を解明するための長期的な縦断調査に関する調査分析(令和5年度)内「予備調査」詳細</p> | 2024 | <p>・「わからない・覚えていない」の回答割合が特に高くなる項目もある。特に主語が自身以外のことを尋ねられている項目や、場面の想起が容易でない内容を尋ねられた場合に回答が難しくなっていると考えられることから、回顧法での設問設定にあたってはこれらのような点に留意を要する。</p> |
| <p>2 前思春期女子のchum形成が自我発達に及ぼす影響～展望法と回顧法を用いて～</p> | 1997 | <p>・中年期から回顧した前思春期のchumの有無と青年期の自我発達上の危機状態との関連については有意な相関はないが、小学生を対象とした展望法に基づく相関値や、高校生を対象とした回顧法に基づく相関値では有意な結果が示されている。この矛盾について、中年期の被験者を対象として前思春期と青年期の2つの時期を回顧させているために時間経過上の諸要因が結果に介入しているのではないかととらえられる。長い時間を経た後の回顧法結果の信頼性の問題が考えられる。</p> |
| <p>3 学校のいじめに関する最近の研究動向——国内の実証的研究から カウンセリング研究, 31, 190-201.</p> | 1998 | <p>児童期及び青年期前期のいじめ被害体験に関する部分については回顧的方法によりデータ収集を行っている。諸変数間の関係を検討するには縦断的方法を用いるべきだが、今回敢えて回顧的方法を用いる理由は以下の通りである(神村・向井, 1998)。①羞恥心や恐れ, 社会的望ましさなどの影響を最小限に見積もることができる, ②いじめを経験した際の物理的・心理的状況を, むしろ客観的かつ冷静にふりかえる余裕がある中での正直で率直な反応が得られやすい, ③多感な小・中学生に直接回答を求めることにより, 彼らの学校生活に望ましくない影響を与えるという調査実施上の問題を避けることができる, ④いじめの収束のプロセスや, いじめの経験がその後の心理的諸変数に及ぼす影響などをあわせて測定することができる。</p> |
| <p>4 回顧法による青年期における劣等感の発達的变化</p> | 2008 | <p>・回顧法を用いることで、対象学校間・地域間の学業水準や経済水準を一定に保ち、対象集団の学業水準・経済水準を考慮した発達的变化を把握できると考える。</p> <p>・回顧順による順序効果の影響を低減させるため、中学生時・高校生時・現在の順で回答するパターンと、現在・高校生時・中学生時の順で回答するパターンの2パターンを作成し、ランダムに配布した。</p> |
| <p>5 世帯所得と子どもの学歴—前向き分析と後向き分析の比較—</p> | 2015 | <p>・親学歴は調査で無回答がやや多いとはいえ、変化することはほとんどなく新制であれば区分も少ないので、かなり正確に測定できる変数である。他方で経済的な背景については、調査対象者の定位家族の所得や(可能であれば資産)を知る必要があるが、これを正確に測定するのはきわめて難しい。成人を対象とするクロスセクショナルな調査で、「あなたが大学に進学したころの親の所得を教えてください」と回顧的に尋ねてみても、正確に答えられる対象者はほとんどいないからである。</p> |
| <p>6 学齢期の組織的スポーツ参加と成人期のスポーツ参加の関連～回顧的データに基づく持ち越し効果の検討～</p> | 2017 | <p>・本研究の限界点として、回顧的な調査であることが挙げられる。本来的にスポーツへの親和性の高い者が組織的スポーツの参加を継続している可能性も否定できず、因果関係について結論付けることはできない。引き続き、縦断的な研究デザインなどを用いた検証が求められる。また、過去の経験については思い出しバイアスがあることがしてきされている。しかし、感情などの想起と比較して、実際に自身が行っていた行動については誤差が生じにくいと考えられ、特に参加していたかどうかの区別はより明確であると推察される。</p> |

| 文献名等 | 年 | 回顧的な調査に関する言及 |
|---|------|---|
| 7 回顧式家族調査 NFRJ-16R のねらいと経過 | 2017 | <p>問題点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記憶の正確な想起に関わる問題である。現在の状況をその都度回答してもらうパネル調査に比して、過去の記憶を想起して回答してもらうことは困難が伴う。また、回答が得られた場合も、経年の中でその記憶が歪められていることも懸念される。 ・もう一つは、1回の調査で回答を求める事項の数が膨大になる。回顧調査は、複数回のパネル調査で尋ねる事柄を一度の調査で尋ねるわけであるから、そのまま考えれば回答者に甚大な負担を強いることになる。表面的な問題で言えば、回収率が低くなることが懸念される。 |
| 8 児童生徒の道徳性形成要因に関する予備的研究～大学生を対象とした回顧的調査の結果～ | 2019 | <p>自由記述式のリフレクティブ調査は、5件法などを用いた本格的な調査ではない半面、大学生が各々の子ども事態を振り返りながら、影響を受けた人物・環境・体験の内容などを主観的かつ自由に記述できるという点において、よりリアルな道徳性形成要因と道徳性形成の実態に迫る可能性を有しているものと思われる。</p> |
| 9 思春期における無視、仲間はずれ、陰口はなぜ生じるのか？～中学生における関係性攻撃動機の質的検討および動機と加害立場・侵害意図との関連～ | 2023 | <ul style="list-style-type: none"> ・中学生では内省力や動機を言語化する能力において発達的に限界があると考えられたため、中学生の動機を補完して把握することを目的に、大学生においても回顧式の調査を実施した。 |

資料：参考資料を基に株式会社サーベイリサーチセンターが作成

①回顧的項目の利用と懸念事項

回顧的項目の利用には、「不正確さ」を中心として以下のような懸念事項が存在する一方、現象から時間が経過することでより客観的な事実として把握し得ることや、時間が経過することそのものの持つ意味などを肯定的にとらえるスタンスも示されている。回顧的項目は、どのような意図で、何を設定するかでその効果が変わってくるといえる。

図表 3-1-4 回顧的項目の懸念事項

| | |
|-------------------|--|
| 記憶の不正確さ | 時間経過とともに記憶が曖昧になったり、都合の良いように書き換えられたりする可能性がある。特に、自身以外のことを尋ねられている項目や、場面の想起が容易でない内容を尋ねられた場合に回答が難しくなる傾向がある。 |
| 主観的バイアスと結果の解釈の困難性 | 回顧的な質問では、対象者が過去の出来事を現在の状況や感情に影響されて解釈する可能性がある。またそのため、結果の解釈に困難を生じることも考えられる。 |
| 測定項目の妥当性 | 抽象的な概念や過去の状況を正確に測定できる項目を設定することが難しい場合がある。 |
| 回答者の負担 | 回顧的な調査項目を盛り込む場合、1回の調査で回答を求める事項の数が多くなる可能性があるため、回答者に大きな負担を強いることになる。そのため、回収率が低くなることが懸念される。 |

資料：参考資料を基に株式会社サーベイリサーチセンターが作成

図表 3-1-5 回顧的項目を利用する利点

| | |
|----------------|--|
| 効率的なデータ収集 | 過去の出来事や経験を一度にまとめて調査できるため、効率的にデータを収集できる。 |
| 羞恥心や社会的望ましさの低減 | いじめなどのセンシティブなテーマについても、時間経過により客観的に振り返ることができ、正直で率直な回答が得られやすい。 |
| 客観的な振り返りの促進 | いじめを経験した際の物理的・心理的状況を、むしろ客観的かつ冷静に振り返る余裕がある中で回答が得られやすい。 |
| リアルな実態把握の可能性 | 自由記述式の回顧録的調査は、影響を受けた人物・環境・体験の内容などを主観的かつ自由に記述できるため、よりリアルな実態に迫る可能性がある。 |
| 内省力・言語化能力の補完 | 小・中学生の内省力や言語化能力の発達のな限界を補完するために、より成長してから回顧的に調査を実施するといった活用方法もある。 |
| 行動に関する想起の正確性 | 過去の行動については、感情などの想起と比較して誤差が生じにくく、特に参加していたかどうかの区別はより明確であると考えられる。 |

資料:参考資料を基に株式会社サーベイリサーチセンターが作成

②行ってきた教育政策に関する項目の必要性

21世紀縦断調査が教育政策に資するものとしてより充実したものとなるには、その観点からの回顧項目も必要である。有識者からも「学校教育も関わってくる時期にあっても必要なものが聞けていないのでは」という懸念が示されており、誰もが体験する学習経験について回顧的に抑えておくことの必要性が示唆されている。

例えば、「学ぶ力」の取組をどう受けたか、学校の課程や、そこでどういう授業を受けてきたか、あるいは、クラスの生徒数、体験活動の状況など、多くの人を経験してきたものが必ずしも捉えられていない。それが大人になってどう発揮されたか、政策課題となってきたものについて、今後回顧的にでも捉えることで、教育政策に資する分析として、子どもの状況や学校を切り口にした分析が可能になる。

③事実項目と意識項目

回顧的項目の不確実性から、一般的には事実項目を中心とするのが良いとされ、有識者からもおおむねそのような意見となっていた。

一方、回顧的に聞くというのは、昔のことを今どう捉えているか、ということであり、今の意識を聞いている、それは回顧項目を入れる目的、使い方に関わる問題で、事実項目ならよくて意識的なものはだめとい

うことではない、という意見もあることを申し添えておく。

意識に関しても、「当時の意識」は不可だが回顧的意識としては可能であり、それが今に影響し、その人を形作っているもの、主観的事実だとしてもそれが大事なものならば検討の余地はある、良い思い出、楽しい思い出を持っているということが、現在のその人を作っているのであり、捉える意義はあるという意見である。

④いじめ・逆境体験など心理学的な視点からの項目

今回特にいじめや逆境体験を回顧的に取り扱うことについて参考にした文献(神村・向井 1998)の中では、いじめ被害体験に関する調査に回顧的方法を用いる理由として、の論文において以下の4点について言及されていた。

図表 3-1-6 いじめ被害体験に関する調査に回顧的方法を用いる理由

| 文献調査結果 |
|---|
| ①羞恥心や恐れ、社会的望ましさなどの影響を最小限に見積もることができる |
| ②いじめを経験した際の物理的・心理的状況を、むしろ客観的かつ冷静にふりかえる余裕がある中での正直で率直な反応が得られやすい |
| ③多感な小・中学生に直接回答を求めることにより、彼らの学校生活に望ましくない影響を与えるという調査実施上の問題を避けることができる |
| ④いじめの収束のプロセスや、いじめの経験がその後の心理的諸変数に及ぼす影響などをあわせて測定することができる |

資料：参考資料を基に株式会社サーベイリサーチセンターが作成

また、直接的な回顧期間ではないが、いじめ被害体験を含む逆境的な体験に関する回顧的な調査を行っている事例(6調査)をみると、調査対象者が10歳代、20歳代の時点で18歳、または、現在までの経験を尋ねている問いが多く確認できた。

図表 3-1-7 いじめ・逆境体験に関する調査事例

| 事例収集結果(事例:6調査) |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・逆境的体験に関する調査項目:29 項目 10 歳代時点→小学生のころの経験:1項目 10 歳代時点→18 歳までの経験:1項目 10 歳代時点→現在までの経験:3項目 18～29 歳時点→18 歳までの経験:1項目 18～29 歳時点→現在までの経験:50 項目 23～27 歳時点→18 歳までの経験:1項目 35～44 歳時点→15 歳～現在までの経験:4項目 <p>※小児期を含む調査項目を抜粋</p> |

資料:参考資料を基に株式会社サーベイリサーチセンターが作成

なお、いじめ・逆境体験を回顧的に取り上げることについては有識者からも賛同が多い。センシティブな内容であることを前提としつつ、その扱いについては以下のような具体的な意見がみられた。

図表 3-1-8 いじめ・逆境体験に関する調査項目についての有識者の意見

| |
|---|
| ・逆境体験については、同一項目の 5 年後の回答、さらにその数年後の回答を比較することで信頼性を見る方法もある。(数年で大きく変わるようならば信頼性は低い) |
| ・いじめに関する項目として、学校の先生の関わりがどうだったかも示唆深いものなので同時に聞けると良い。 |
| ・いじめに関することは複雑なもの。加害と被害が入れ替わったり、連鎖したりする。質問するにもその辺の工夫が重要だ。 |
| ・SNSの発展の中で成長してきた世代なので、校内などで直接体験したものと、ネット上での体験と、両方を収集できると良い。 |
| ・逆境的な体験に関する調査項目は、その中身と時期をどう聞くのかが問題。聞けるのであれば「時期」「頻度」「程度」を聞けるとよいが、かなりセンシティブな項目なのでどこまで聞けるか。 |
| ・逆境体験に関しては幼少期のいじめ体験が将来の就業状況にまで影響しているという研究もある。時代を限定する方法(小学生のとき、中学生のとき、など)と、しない方法(今までに、と聞く方法)いずれもあるが、教育政策の観点からは全部、時期を特定して丁寧に聞いたほうがよい。 |
| ・ネガティブ要因(例:逆境体験)とポジティブ要因(例:読み聞かせ体験)の両方があり得る。どちらをより重視するか、政策としてどちらにアプローチするか次第だろう。 |
| ・ポジティブ要因も回顧的にでも丁寧にとらえる必要はある。例えば子どものころに本の読み聞かせをしてもらった経験など。「子どものころ」と漠然としたものでもよい。)読み聞かせは親の教育的配慮、態度の 1 つの変数として有効だ。 |

資料:参考資料を基に株式会社サーベイリサーチセンターが作成

4. 小括

参考にした文献の調査結果からみると、回顧期間の設定根拠に関する言及は確認ができなかったが、回顧的な調査を実施している事例から、調査対象者が20歳以上になってから子供のころのことを尋ねている問いが多い傾向にあることが確認できた。

心理学的視点から回顧的な調査項目に関して述べている文献を確認したところ、いじめ被害体験に関する問いについて、回顧的方法を用いる理由を確認することができ、その理由から、逆境体験に関する調査を回顧的方法で実施することが有用であろうことが確認できた。

逆境体験に関する調査を実施している事例をみると、10歳代、20歳代の時点で18歳、または、現在までの経験を尋ねている問いを多く確認できた。

これらの結果から、10歳代後半から20歳代前半時点で回顧的な調査を実施することで、一定の結果を得ることができるであろうことが伺える。

しかし、事例収集結果は事例数が少なく、一つの事例の調査項目を1件ずつカウントしていることから、回顧的な調査項目や逆境体験に関する調査項目を多く設定している事例の影響を強く受けている。また、調査対象者の年齢と回顧している時点の詳細を把握できていないことから、事例からは回顧期間の詳細を確認することはできていない点には注意が必要である。

21世紀出生児縦断調査における回顧的項目の導入は、子どもの成長過程における過去の経験の重要性を捉え、より精緻な分析を行うための有益な試みである。今回の調査研究で指摘された、記憶の不確実性や回答者の負担といった課題に留意しつつ、具体的な質問内容、適切な時期、質問形式、などを慎重に検討する必要がある。その際に必要なのは、教育政策に資する分析のために必要な項目は何か、という視点である。有識者からの貴重な意見も参考に、縦断調査の特性を活かした効果的な回顧質問項目の設計と配分を進めることが、今後の教育政策の立案に資する上で極めて重要である。

V 参考資料

1. 本報告書で参照・言及した文献について

| 発行機関・著者等 | 発行年 | 文献名等 |
|------------------------------|------|---|
| 文部科学省 | 2024 | 若者の生活や意識に関する調査分析 |
| 長尾 博 | 1997 | 思春期女子の chum 形成が自我発達に及ぼす影響～展望法と回顧法を用いて～ |
| 神村栄一・向井隆代 | 1998 | 学校のいじめに関する最近の研究動向―国内の実証的研究から カウンセリング研究, 31, 190-201 |
| 高坂 康雅 | 2007 | 回顧法による青年期における劣等感の発達的变化 |
| 平沢 和司 | 2015 | 世帯所得と子どもの学歴―前向き分析と後向き分析の比較― |
| 青柳 健隆・石井 香織・柴田 愛・荒井 弘和・岡 浩一朗 | 2017 | 学齢期の組織的スポーツ参加と成人期のスポーツ参与の関連～回顧的データに基づく持ち越し効果の検討～ |
| 保田 時男 | 2017 | 回顧式家族調査 NFRJ-16R のねらいと経過 |
| 松原 岳行 | 2019 | 児童生徒の道徳性形成要因に関する予備的研究～大学生を対象とした回顧的調査の結果～ |
| 梅津 直子・新井 邦二郎・会沢 信彦 | 2023 | 思春期における無視、仲間はずれ、陰口はなぜ生じるのか？～中学生における関係性攻撃動機の質的検討および動機と加害立場・侵害意図との関連～ |

2. 本報告書で参照・言及した調査について

| 実施機関 | 発行年 | 調査名等 |
|-------------------|------|--------------------------------------|
| 文部科学省 | 2024 | 若者の生活や意識に関する調査分析 |
| 法務省 | 2023 | 非行少年と生育環境に関する研究 |
| 大阪府 | 2022 | 健康と生活に関する調査 |
| 公益財団法人日本財団 | 2022 | 第 5 回自殺意識全国調査 |
| 日本家族社会学会全国家族調査委員会 | 2022 | 青年期から成人期の振り返り調査 |
| 独立行政法人国立青少年教育振興機構 | 2021 | 子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究 |
| 独立行政法人労働政策研究・研修機構 | 2010 | 労働政策研究報告書 No.125 学校時代のキャリア教育と若者の職業生活 |
| 筑波研究学園都市交流協議会 | 2019 | 第 7 回生活環境・職場ストレス調査 |

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託業務として、株式会社サーベイリサーチセンターが実施した令和6年度「公的統計調査等を活用した教育施策の改善の推進するための取組」の成果をとりまとめたものです。

